

繪本通俗三國志



繪本通俗三國志





繪本通俗三國志目錄

○卷之四十八

姜維祁山八陣を布く
 司馬昭魏主曹髦を弑す
 姜維車を棄て大に戦ふ
 姜維大に洮陽城に戦ふ
 姜維沓中お禍を避く

○卷之四十九

鄧艾鍾會漢中を破る
 姜維大に劍門關を戦ふ
 鄧艾嶺を越て成都を襲ふ
 諸葛瞻大に鄧艾と戦ふ

蜀主劉禪興觀魏を降る

○卷之五十

鄧艾鍾會大に功を争ふ
 姜維一計三賢を害す
 司馬炎受禪臺を築く
 羊祜病中杜預を薦む
 王濬計て石頭城を取る

目錄終

通俗三國志卷之四十八

○姜維祁山入陣を布く

蜀の景耀元年大將軍姜維又二十萬の勢を興し廖化張翼を先手とし王含蔣斌を左備とし蔣舒傅僉を右備とし蒲濟を後備として魏を伐んとす此時後主劉禪專ら酒に溺れ色を耽りて中貴黃皓と云る佞人を用ひ萬一一人は任せて日夜政事を治す後宮又在て酒を飲玉ふ黃皓又美女を擇んで獻つり後主の心を惑して擅まゝに逆威を震ふ時劉琰が女房お胡氏と云者あり顔色極めて絶けれ宮中へ入て皇后見ゆ皇后之を一月あまり留め置その後家へ回し玉ひけれ劉琰心の内に我が女房の後主と私と通じたるの事疑ひ手下の軍兵五百人を廣庭へ召出し女房胡氏を縛りて其顔を帯あから踏せける後主この事を聞玉ひ古より生たる人の顔を踏刑罰を問はずとて武士を命じて劉琰を捉へ五百人の士卒と共に市へ出して斬せらる是より命婦朝廷へ入事を容す去程姜維既小漢中へ出諸將を集めて申ける

我毎度師を出して功を成さず心の内深く是を愧今魏國臣強して君弱し此時お乘て天下を定めんと欲す先いづくより攻べき夏侯霸が曰祁山へ敵少々備ありと申せ共其武を用るの池あり此故孔明六回迄此處より出玉へり姜維此義も同じて盡く祁山を望て進發し谷の口へ陣をとる此時魏の鎮西將軍鄧艾の隴右の勢を集め祁山へ陣屋を構へて居たりしが蜀の勢既谷の口迄出て三ヶ處へ陣を取たりと告るを聞て自ら山より上りて之を望み我計る所不出すと云て大お喜ぶ是元來鄧艾よく其邊の地理を考へて蜀の勢の陣を取べき處を見定め祁山より遙く地の底を堀て路を拵へ置り今蜀の勢案の如く望む處へ陣を取れる故も此の如く喜ぶあり姜維の活る事をも知す地理を考へて中軍の陣屋を構へ右の陣より蔣舒傅僉左の陣より王含蔣斌共兵を分て之を守り俄お柵を結び逆茂木を構へ四方の門未だ備らず鄧艾が堀たる路の左の陣中へ通せり其夜鄧艾我子の鄧忠と大將軍懿と各一萬余騎を付て左右

より蜀の陣に向ひせ又副將鄭倫は五百の勢を付けて彼地の底より潛入しむ蜀の陣より要害いまだ備らざれば萬一敵の寄る事有んとて一人も油断せず左の陣おも王含蔣斌二人甲をも卸すして居たる所又其夜の二更お俄に陣中上を下へと躍動して又外より敵一萬余騎よて推よせ内外より散々お攻やぶる王含蔣斌命を棄て戦ふと雖も敵御方を見分難く互ひに自ら騒乱して盡く逃走る姜維の中軍に在て何事ぞと問ふ一人走り來り魏の勢内外より攻て左の陣既破れたりと告げれば姜維馬を打上り兵を四方お備て中軍の前より立寄り又動く者い立所又斬んと下知して右の陣屋へも其趣きを觸つるの如く魏の勢勝れ乗て十度餘り攻入んとする蜀の勢湛然として動ず鐵を調へて射たりしるに鄧艾曉天迄戦ひ了り引て回りけるの深く嘆じて申けるに姜維よく孔明が傳授を得たり此の如く計事を用ひても乱れず急いの中々退け難うらんとぞ感しける次の日王含蔣斌敗軍を引て中軍お來り拜伏して罪を請

ければ姜維が汝等の罪あわらず此我地理を明せざる故ありとて又兵を分與へ討れたる屍を敵の堀たる地の中へ埋させ魏の陣は戰書を下して明日勝負を決せんと云遣しければ鄧艾喜んで許諾す次の日兩方の軍勢祁山の前お打望み姜維先づ孔明が八陣の法を守りて天地風雲鳥蛇龍虎の形を成て八門を備へければ鄧艾是を見て又魏の勢を備へて八陣を布左右前後悉く相同ト姜維鎗を提て馬を出し鄧將軍は對面せんと呼りければ鄧艾も馬を陣前より乗出す姜維大音上て汝今我法を效つて八陣を布汝よく變法を知たるりと云ければ鄧艾笑つて申けるに此陣の汝が師の孔明あらでい知る者あらじと思へるか天下の人悉く之を知予何ぞ變法を知らざらんとて馬を回して旗を持って左右を招げば變じて八々六十四の門戸とある又進み出姜維我變法を見たるりと呼りければ姜維笑つて曰汝が變法此の如くならば我八陣と戦ふべきか鄧艾が曰我何を戦ひざらんとて隊伍を乱さず次第進め蜀の勢も盡く打向ひ

鄧艾中軍を在て下知ををし初の程に互に八陣を衝て戦ひ共破られず圍れず時すでお移りければ姜維中軍を入旗を執て左右を招げば忽然として變じて長蛇捲地の陣とあり鄧艾を真中より取込で四方八面喊の聲地を震ふ鄧艾此陣法を知らず心中大に怖れて次第蜀の勢近付ければ諸將を力合せて一方を破破らんとすれ共敵の圍愈々重り鄧艾早く降れと呼りる聲諸處に聞へければ鄧艾大に哭き我自ら其能は傲つて姜維が計事お中れり如何せんと言ける處に忽ち西北の方より喊の聲響いて一手の勢打て入鄧艾之を救の勢と見て力を奮つて還々逃れたり鄧艾を救ふ者の司馬望あり一手を成て本陣を回らんとそれ祁山に構ふる九ヶ處の陣屋既蜀の勢を取れたり鄧艾驚いて渭水の南に陣を取司馬望を召て申けるに我既危うりし御邊何とて姜維が陣法を知て助け玉ひし司馬望が曰予昔し荆州に遊學して孔明が友お崔州平石廣元お云者と交り此陣を習ひ聞り向ふ姜維が變する陣に長蛇捲地の

陣なり若他の所より討て破るると云事をし吾その首西北を在を見て首より打て入れたれば自ら乱れたり鄧艾拜謝して曰我多くの陣法を學びしかども更此法を知らず將軍能之を知れり明日此法を用ひて祁山の陣を取返し玉へ司馬望が曰予此法を習と申せ共姜維及ぶ事能はず姜維智勇世お絶れたる上孔明が兵法を傳へて等閑の輩あわらず我明日出て姜維と陣法を争ふべし將軍其間一手の勢を引て密に祁山の後より廻り兩方より夾んで攻玉へ然る時祁山の陣を奪ふべし鄧艾甚た喜び蜀の陣へ戰書を下して明日陣法を聞いんと云遣す姜維許諾して使を回し諸大將を集めて申けるに我諸將武侯秘傳の兵書を受此陣の變通共三百六十五様周天の度敷法て此より外も出るあし鄧艾今使を以て明日陣法を聞いんと云送る是必ず内お詐りの計事あらん汝等之を知れりや慶化が曰明日陣の前よて明りに見べし姜維乃ち張翼慶化二人各一萬余騎を付けて山の後に伏置き次の日悉く祁山の前より出て陣を張

此時鄧艾の副將鄭倫を先手として自ら祁山の後へ廻りけ
れバ司馬望も渭南の陣を出て祁山の前陣勢を張姜維之
を見て大音上げ汝陣法を翻んと云送れり一陣を布見物
せんと云けれバ司馬望乃ち八陣を布姜維笑つて曰之の我
師の七陣あり汝今竊學んで之を知れるク司馬望が曰汝
が師孔明も他人の法を竊み習へり争う我八陣の根本を知
ん姜維か曰汝が八陣誠ニ根本あらバ此陣の變法い程の
ある司馬望笑つて曰我能是陣を布あんど變法を知らん
此陣凡そ九々八十一の變法有り姜維冷笑て曰汝試みに陣
を變せよ司馬望乃ち中軍入兵を此彼又排列し良久しく
して出て申ける汝我變法を知れるか姜維が曰汝は是非
の中の蛙あり焉んぞ之奥を知ん我陣の周天の度敷を按じ
て三百六十五の變法あり司馬望心の内何とぞ時刻を移
して鄧艾を後へ廻さんと思ひけれバ答へて申ける汝妄
り陣法又做る異お三百六十五の變あらバ試よ變せよ一
見せん姜維が曰予が變法を見んと思ひ早く鄧艾を出せ

司馬望が曰鄧將軍の深き計事あり汝が輩と陣法を争ふ
事を好す姜維笑つて曰汝此處まで我を欺き留密か又鄧艾
を後へ廻さんと計ける命司馬望大に驚き兵を進めて戦
んとそれバ姜維馬の上より鞭を以て一度招ぐよ蜀の大軍
喚て苴り縦横無碍お苴立けれバ司馬望あじかひ堪へき殘
り少く討れて馬物の具を打捨て遣々走りけり鄧艾の密
に祁山の後へ廻りけるが先手の大將鄭倫山の際を通る所
に忽然として鎖砲一聲響き鼓を打喊を造て一彪の軍馬殺
到す眞先あるの蜀の大將廖化あり刀を舞して討て苴り鄭
倫を馬より下し斬て落しけれバ鄧艾驚いて急に退りんと
するよ又一手の勢打て出蜀の大將張翼勢ひも棄て攻た
りしかバ鄧艾前後を包まれて討る者數を知らず命を棄
て戦ひ一方を打破りて遣々本陣へ回りけるが其身も痛手
を負て箭四筋迄射付られけり司馬望も驚しく討れて一
處渭南の陣へ集り今姜維勢ひ大よして退ぞ難し幸ひ
蜀主劉禪日夜酒色は溺れて佞人黃皓妄りも權を専らよ

す問謀の計事を用ひて姜維を召回させん如何よと云け
れバ鄧艾この義然るべしとて誰り密に蜀の都へ入て此計
事を成んど問ふ襄陽の黨均と云者進み出て曰某往て此
計事を成ん鄧艾乃ち金銀重寶を授けて潛り成都へ行しむ
黨均忍んで成都へ入金銀を以て黃皓の心を結び諸所を流
言して姜維天子を怨る事あり大軍を總て魏へ降らんとす
と沙汰しけれバ黃皓この由を天子に奏し事延引せバ叶ふ
べのらず早く詔を下して姜維を召回し玉へと勸む後主
昏迷して大に驚き追々勅を下して姜維をぞ召れける姜維
の數度の戦ひは打勝て心の内深く喜び毎日魏の陣へ推寄
て戦ひを催せども鄧艾固く守りて出ざりけれバ心怪んで
居たる所お忽ち天子詔あり兵を収めて早々お回れと告
來りしりバ姜維その故を知らず心驚いて自ら夜を日と繼で
馳回り廖化張翼を命じて大軍徐々と退りしむ廖化乃ち張
翼も向つて申ける天子今姜維を召回さるよ必ず敵の
間謀も中り玉ふあらん孫子も將在外有レ所レ不受ニ君命

と云り是程お戦ひ勝ちたる師を假令勅命あり共退くま
張翼か曰姜維毎年師を出して國中の軍民一日も安からず
此故怨を合むもの多し民の心もし變せバ如何して國を
保たん如す此の勝軍を面目もして國へ回りにて人馬を思め
ん廖化り曰もし急退の敵必ず追來らん張翼が曰諸軍
次第を乱さず法を守て退のしめ我等二人後陣を備て追手
を拒んとて大軍を先靜々と退のしむ鄧艾司馬望此由を聞
さらバ追討にせよとて急兵を出しけるが蜀の勢人馬乱
れす前後の備整々として徐々と引けれバ鄧艾嘆つて申け
る姜維能孔明が兵法を傳へたり之を追バ御方却つて破
るべしとて盡く引回す姜維の日夜を分たす成都へ回り朝
に入て天子を見へけれバ後主劉禪宣ひける朕久しく卿
を回らざるを見軍民の疲ん事を思ひ此故お召回す別
他の事有非姜維が曰臣祁山の軍を打勝て魏の陣を奪
ひ取既大なる功を立んとする所何故中途よして召
回し玉ふぞ是必ず鄧艾が問謀の計事お落され玉ふ成るべ

し臣再び師を出して天子の恩を報じ孔明の志を繼ぐと
奏しければ後主默然として答へ玉はず此よりして黄皓深
く姜維を妬み恨るの心あり

○司馬昭魏主曹髦を弑す

黨均計事を以て姜維を退け祁山より其事を語りけれ
ば鄧艾大喜び司馬昭又向つて申ける今蜀主酒色を溺
れて讒佞の人時を得たり必ず久ららずして内變あらんと
て黨均を洛陽より上て其趣きを奏せしむ司馬昭之を聞てこ
らば此時に乗て蜀を滅さんと云ければ中護軍賈充申ける
ハ蜀未だ伐べくらはし司馬昭曰其故如何賈充曰今日天子
深く將軍を疑ひ玉ふ若輕々しく都を出て遠く蜀の國迄下
り玉ハ必ず事の變あらん先年黃龍軍陵の井の内より顯れ
たる時百官表を上て目出度瑞光ありと申ければ天子嘆い
て宣はく是あんの目出度事か有ん其龍上天に在す下田よ
わらず却つて井の内より在る苦を受たる幽囚の兆なりとて
自ら潛龍の詩を作り玉ひしが詩の詞深く將軍を疑ふ意あ

り其詩曰く

傷哉龍受ノ回 不能躍ニ深淵 上不飛ニ天漢
下不見ニ於田 蟠居干井底 歎我亦如然

此の詩の意を以て能知玉へと云ければ司馬昭大に怒り此
人も曹芳に教んとするかとて賈充又向つて曰もし事の變
あらば只汝が身れ上にあり賈充が曰御心を安じ玉へ某よ
く計事を成ん司馬昭左右を顧みて成倅成濟二人又向つて
申けるハ曹髦が首の汝兄弟の手の内よりあり二人之を聞て
許諾して出ければ時又魏の甘露五年夏四月司馬昭自ら劍
を帶て殿に昇る曹髦震ひ恐れ目を側て視居たりければ
司馬昭問て曰我を如何なる人と思ひ玉ふぞ曹髦默然と
して答ざりければ群臣皆曰大將軍功高く徳大あり早く晋
公お封つて九錫を加へ玉ふべし曹髦首を低て居たりしか
ば司馬昭聲を荒らげて曰我父兄三人魏お仕へて大なる功
あり今晋公たらんとそ之を許容し玉いぬ曹髦恐れ戦ひ



第六十一

て答へて曰、誰れに従ひざる者わらん、司馬昭曰、酒龍の詩我
を以て鯀鯀とし玉ふ是如何なる禮ぞ曹髦答ふる事能はず
汗を流して背を洒けれ、司馬昭あざ笑つて殿を下る百官
是を見て膽を冷さずと云者、亦し曹髦後官も入日夜涙を流
して次の日侍中王沈、尚書王經、散騎常侍王業三人を召て中
ける、司馬昭が篡逆の志、天下皆之を知る、朕坐ら辱しめ
を受けるに、恐びず願くば汝等と共に誅伐せん、王經曰、昔し
春秋の時魯の昭公、季氏を討んとして却つて其國を失
ひ天下の人の笑ひと成れり、今權柄すで、司馬氏も版す内
外の群臣四方の武士、逆順の道理を顧みず、皆競ひ靡
きて爲よ命を棄んとす、陛下今一軍の兵とて、もあし大將と
成べき人もあし、若辱を忍び玉ふざる時は、是疾を除んとし
て却つて疾を深ふするなり、若し疾深き時、禍ひを成す事
少ならず、必ず輕々しく爲玉ふ事勿れ、曹髦懷より白き扇よ
書たる詔を出して、地を投ずて是争でり、忍ぶべき朕が心
既も決せり、死すとも何を畏れんとて、郭太后も見へて其事

を告げれば、王沈是れを見て、密に王業と謀して曰く、事既も
急なり、我等空しく三族を滅されんより、偪や司馬公に訴へ
て禍を免れんとて、王經に向つて古より雖も三智慧、不レ如
二乗勢一と云り、吾等早く司馬公も此事を告て一命を扶ら
ん、いざさせ玉へ、伴いんと云ければ、王經怒つて申ける、主
憂ふる時の臣辱めらる、此天下の常あり、争の命を惜みて道
お背く事をせん、我願くば身を殺して仁義を成ん、王沈、王業
案も相違し、王經我も從はずとて、直ちも行て司馬昭を訴ふ
暫くありて、魏主曹髦外も出て、護衛焦伯と云者も命じて宮
人の召使ふ下部の類を果めさせ、三百余人有ければ、自ら劍
を抜て、鎧も乗り、鼓を打て、已も南闕迄出ければ、王經地も拜
伏し、涙を流して申ける、今是等の人を以て司馬昭を代玉
はん、羊を驅て虎の口も入が如し、空しく死して何の益も
有ん、臣命を惜みて、此事を申すも非ず、事の必らず成ざるを
知故あり、魏主曹髦曰、朕既も打出り、汝今も諫る事勿れ
とて、龍門を望んで出ければ、向より買充鎧たる兵數千騎を

卒し成体を左も備成濟を右も備へ、浩々として馳きたる曹
髦、劍を執て大も怒り、朕の乃ち天子あり、汝等狼りも宮中へ
入る、君を殺ん爲めと叫ばりければ、買充急ぎ成濟を呼で
申ける、司馬公常も汝を養ひ玉ふ、何の爲ぞ今日の用お
備ん爲あり、若此事仕損じらば、汝三族を滅されん、成濟戈を
執て殺すべきり、生取べきりと問ければ、買充曰、司馬晋公
の命あり、速りも弒せ、成濟戈を舞して、聲も近付ければ、曹髦
大も怒り、匹夫如何ある無禮ぞと云も、果ざるに胸を刺て突
落し、成濟大音上げ、司馬晋公の命を受けて、無道の君を弒すと
呼り、再び戈を擧て、背より腹へ突透しければ、曹髦、筆の
下も倒れ死す、一人従ひ來れる焦伯、これを見て、鎧を撚りて
驚りければ、成濟只一合お刺殺しけり、王經の跡より來りけ
るが、已も曹髦か弒されたるを見て、大音上げて、罵り買充逆
賊、おんぞ君を弒せると云ければ、買充兵を下知して、之を生
どり、急ぎ此由を司馬昭も報す、良有りて、司馬昭來り、曹髦が
死したるを見て、伴りて驚き、頭を以て地を叩き、聲を放つて

哭く、体をあし、百官も其由を告知さしむ、時も太傅司馬孚馳
來り、曹髦の屍を抱きて、哀み哭き、陛下の弒され玉ふ、臣が
罪ありと云ければ、司馬昭曰、天下一日も君あくて、叶ふ
まじ、早く葬りを成て、別も新君を立てしとて、棺槨を備へ
て、曹髦を偏殿の西も葬る、曹髦是時年二十歳あり、司馬昭又
誰をか天子と爲べきと議するも、王業が曰、武帝の孫、燕王曹
宇の子、常道卿公、今安次縣も居玉ふ、此を立て、君とすべし、司
馬昭之も從ひ、車駕を備へて、迎へさせ、其後百官を集めて、君
を殺したる事を議するも、尚書僕射陳泰一人來らず、此も因
て、其身、尚書、荀顛を使として、召しめければ、陳泰涙を流し
て、出來り、喪の服を被て、曹髦の靈前も詣り、拜哭して、悲み祭
る、司馬昭も伴りて、哭く、体をあし、足下此事如何思ひ玉ふぞ
と云ければ、陳泰が曰、買充その君を弒と早く首を刎て、天地
を謝すべし、司馬昭默然として、良ありて、申ける、再び其次
如何すべし、陳泰が曰、買充が首を刎る外、何の次と云事有
ん、司馬昭が曰、成濟大逆無道として、仁義の君を弒せり、彼が

三族を誅して罪を正すべしとて武士を命じて成濟を縛らしむ成濟大言わげ何の罪ありて我を斬りしを賈允汝が命なりと云て我天子を弑せたりと呼りければ司馬昭先づ其舌を抜せ弟の成倅と共に市を出して首を刎三族を平げしむ其後司馬昭宮中に入郭太后を奏して申ける逆主曹髦兵を起して太后を弑し百官を害せんとして却つて成濟を討れたり臣今成濟を誅して其罪を正す太后詔を下して諸人の心を安らしめ玉へと云ければ郭太后をの威を畏れて之れに従ふ司馬昭乃ち太后の詔と号して王經が三族を市に出して誅せしむ王經既延尉の方を捉りれ老母の縛られたるを見て頭を以て地を叩き不孝の子かゝる憂目を母に見せ申す事の哀しさよと云て哭きければ其母笑つて申ける人として誰り死せざる者有ん常道に當て死せざるを畏る今茲に至つて命を棄る我が平生の願なり何ぞ哭く事有んとて次の日悉く市より引出されども顔色少しも變せず王經は向つて申ける我子今死す

べき道を得たり怯る事勿れとて快く笑つて斬れしりば聞人皆涙を流しける其後太傅司馬孚王者の禮を以て曹髦を祭りければ十日餘り過て常道卿公來れり賈允しきり司馬昭を勸め魏の正統を繼で自ら天子と成玉へと云ければ司馬昭曰昔し文王の天下を三分して其二を保ち猶般も事へ玉へり此故も孔子も周を至徳と稱し玉も魏の武帝の猶漢の禪を受玉らず我魏の禪を受ざるが如しと答ければ賈允等これを聞てこそ司馬昭が心其子を天子とせん爲なりと知てければ六月甲寅の日司馬昭自ら常道卿公曹璜を天子の位に登せ景元と改元す曹璜位も即て名を曹奐と改め司馬昭を丞相晋公と封じて錢十萬貫絹一萬疋を賜ひ百官悉く封賞ありて國中無事に治り司馬昭權を秉事又日比は百倍せり

○姜維車を棄て大に戦ふ

司馬昭既魏主曹髦を弑して曹奐を君とする由蜀の國も昭へければ姜維大に喜び我今魏を伐し時を得たりとて

吳の國へ使を遣して其兵を起させ蜀の勢十五方を調へて數千輛の車を兵糧を積糜化を子午谷より出し張翼を驍谷より出し自ら斜谷より出て盡く祁山を集る此時魏の鎮西將軍鄧艾祁山を陣を取て居たりしが蜀の勢三手分れて出來ると聞諸將と計事を議しければ參軍王瑾進み出て曰我れ一つの計事あり言を以て云難し書付て此有り願くは蜀の勢を破らん鄧艾開き見て申ける是計事誠な奇妙あれ共只畏らくは姜維を欺く事能はじ王瑾曰一命を棄て此計事を成ん鄧艾曰御邊志を堅ふして若此計事を成就せば必ず大なる功成んとて五千余騎を分與ふ王瑾急ぎ斜谷の路より出向ひ蜀の先手の勢も逢て我れ魏の國より降參の者あり此由を大將軍に告よと呼りければ姜維之を聞て王瑾一人を召て仔細を問王瑾地に拜伏し某魏の尙書王經が姪も王瑾と申ものあり近頃司馬昭其君を弑して某が三族を市に出して首を斬某一人祁山の陣に在て幸ひ命を扶る今將軍師を出し罪を正して魏

を討玉ふ某手勢五千余騎を引て來り降る願くは忠を盡して國家を報ト司馬昭を滅して一族の讐を雪ぐんと云ければ姜維限なく喜び御邊既御方は降る能く忠を盡し玉へ功あらば重く用ん御方つね思ふ者兵糧なり今兵糧を積たる車みも川口迄出し置り御邊往て此處へ運び來れ我れ祁山を出て戦ふべしと云ければ王瑾心の内も大に喜び一儀も及ばず打立んとす姜維曰御邊の勢五千余騎の甚だ過たり三千余人を引て米を運ばしめよ殘る二千人の勢の我乃ち案内者として祁山を出ん王瑾疑はれん事を怖れ三千余騎も出て出ければ二千の勢の姜維が方留めて大將傅僉の手も慰せしむ暫くあつて夏侯淵來り姜維も向つて申ける何故も王瑾が降參を實ありと思ひ玉ふを吾久しく魏に在て了み王瑾の姪ありと云事を聞かず必ず詐りの計事も候はん姜維笑つて申ける我已其詐りを知此故も其勢を二つに分たり我今敵の計事を就て計事を用ひんと欲す夏侯淵が曰願くは將軍の計事を聞ん姜維

が曰司馬昭が奸雄たる事曹操も超たり已に王經が三族を滅して焉んぞ其親き姪を生て置べき況んや兵を付て國の界を守しむる事をせんや此は因て先其詐りを知御邊の見我が意も同じとて今迄斜谷の路より出たりしが却つて此路より出す諸處の路條も人を伏て王瑾が内通の使を捕へしむ案の如く十日も過ぎるも使を捉來りしうバ使を賣て懷より書簡を出す乃ち開き見れば鄧艾が方へ内通の書もて今蜀の兵糧を運び候急ぎ合戦を始め玉へ密に兵糧を盗んで小路より回らんと書たり姜維大に喜んで先使を斬て棄させ八月十五日ハ大軍を引て斜谷の外塙山の谷より來り玉へ我等兵糧の車を盗んで馳回るべしと書改めて一人の使を仕立鄧艾が陣へを遣しける其後蔣舒を大將として斜谷より出し姜維自ら夏候霸と塙山の内に埋伏して數百輛の車は乾ける柴を稠硫黄焰硝を内籠て青き布を以て四方を包み兵糧の如くお見せて傳命も命じて王瑾が分たる二千の勢も之を守らせ運糧の旗を指て塙山の内に往

來せしむ去程も鄧艾ハ王瑾が内通を待て未だ戦ふ事も無し所は使密も來りて計事を約しければ心の内深く喜び自ら司馬望と斜谷の口より出て毎日戦ひを催し態も矢軍あて日を送る已に八月十五日に至りければ鄧艾自ら五萬余騎もて塙山の谷も陣を取山の上も人の上を上げて見せしむるも夥しく兵糧の車谷の際より推來ると中も鄧艾馬を出して之を望むも選糧の旗を指て盡く蜀の勢ありしかバ肯て輕々しく進まざる所も手下の大將告て日日も已に昏み及べり早く進んで谷を出玉へ鄧艾が日向の山の勢も深く打掩ひて若敵の伏勢など有時の急も退く事難からん暫く此も留りて事の様を窺ふべし時又早馬一騎馳來り王瑾兵糧を盗んで走る所も後より敵の追事甚だ急あり速くも救ひ玉へと云ければ鄧艾之を聞て大に驚き兵を引て進みけるに已に初更の比も至つて月の光も晝の如く山の後も賊の聲起りしうは是定めて王瑾が敵も退れて戦ふあるべしとて急も山を廻んとする時木陰の中より一手の勢殺到す

鄧艾驚いて之を見れば蜀の大將傅僉先も進んで大音揚げ鄧艾匹夫既も姜將軍の計事も落され何ぞ早く降らざると呼りければ鄧艾膽を冷して計事も當れりとして急も逃んとするも四方の車より火燃出硫黄焰硝四方も散乱して山々峯々より蜀の伏勢一度お起る魏の勢慌騒いて七斷八續討るも者數を知らず鄧艾を生取者の千金を與へ萬戸侯も封せんと聲々も呼りしうバ鄧艾膽魂ひも身も副す馬を乗せて甲盔をも卸すて態も歩立の勢も打退り樹の根岩の稜に捫付嶺を越て遠々も逃伸たり姜維夏候霸の鄧艾を伐んとて歩立の勢も目も掛す馬を早めて逃る者を追たる故も鄧艾を打洩しけりされども魏の勢も五万余騎も討れ破ひの焼れて扶ある者も無りけり王瑾の浩る事も知す川口より兵糧の車を推て漸く祁山へ近付ける所も手下の兵一人走り來て申ける日比の計事も洩て鄧將軍も破れ玉も蜀の大勢此の處へ推寄せ候王瑾大に驚き兵を下知して兵糧の車も火を付させ今逃れんとせば惡かる

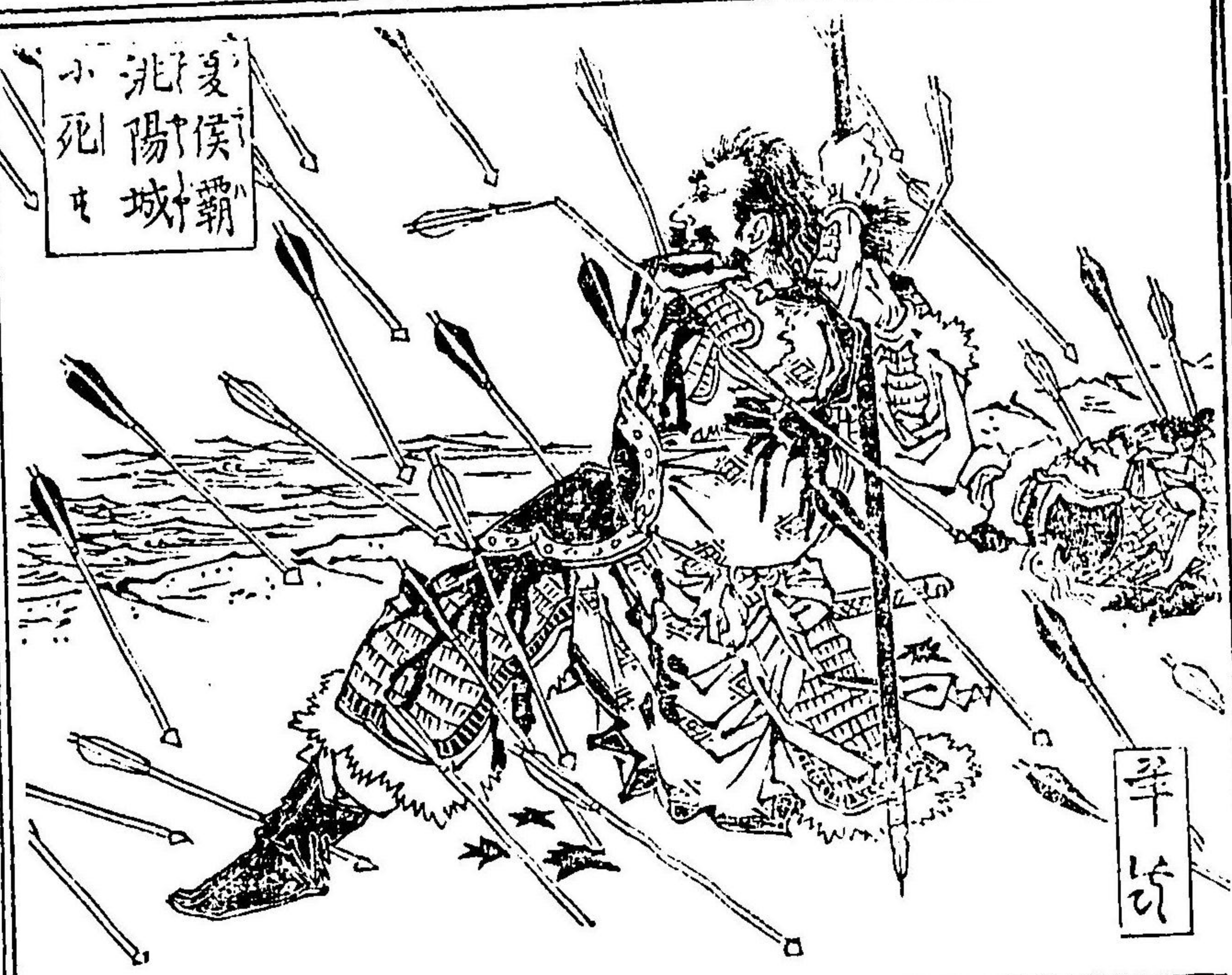
べし汝等只命を此處も棄よとて祁山の方へ回らす西を指て走りけるも兵糧の車夥しく火燃あがり蜀の勢も三分れて追りくる姜維も兼て計事の破れたるを知り王瑾定めて魏の國へ逃回るべしと思ひけるも案も相違して王瑾却つて漢中を指て逃入難所の機を燒落して追手を拒ぎければ姜維漢中の破れん事を怕れて小路より南谷も出前後を遮つて攻たりけるも王瑾が三千余騎悉く討れて其身も黑龍江も沈みて失てけり姜維生取共をバ盡く埋殺させ勝軍のしたれども多く兵糧を燒れ機を落されしうバ暫く漢中も陣を取て又陣を出さんと用意を爲す鄧艾の夥しく討れて祁山の陣も回り表を上て罪を乞自ら官を貶しけれども司馬昭日頃大いある功あるを以て却つて厚く恩賞し討れたる者の妻子に財寶を與へ又五万余騎を副て諸処の要害を守らしむ

○姜維大いも洮陽城も戦ふ

蜀の景耀五年冬十月大將軍姜維落たる處の機を造らせ大

小の車は兵糧を積漢中の川條より舟筏を浮べて用意悉く
 備りければ成都も表を上て臣師を出す事數度及んで未
 だ大功を濟すも申せども頗る魏の大將の膽を挫ぐ今兵を
 養ふ事日久く戰はざる時ハ懶し懶くして徒ら日を送る
 時ハ必ず病を生ず況んや諸軍皆命を棄ん事を加ふ臣又師
 を出して若勝事無んば必ず罪を正し玉へと奏しければ此
 時後主劉禪愈々酒を溺れ色を耽りて心昏迷して決するも
 暇を失し太史譙周進み出て申けるハ臣夜天文を視る蜀の
 分野將星暗して明かならず今大將軍又師を出して魏を伐
 んとす此度の軍必ず利有まじ天子詔を下して止め玉
 んべし後主宣ひけるハ今一度の勝負を見て若利あるんば
 重て止むべし譙周再三諫むれ共背て從ひ玉のさりしりば
 家も回りにて大い哭く其子之を怪み父何を哭き玉ふぞと
 問ふ譙周曰天子ハ酒色を溺れて政事を治め玉のさす臣下ハ
 強して名を立んとす軍民ハ恨み哭き佞人ハ時を得たり國
 の滅亡近付ぬ是故も悲むあり其子告て曰父既も先見の明

あり何ぞ早く魏も降り玉のぬぞ譙周怒つて申けるハ我先
 帝孤を託するの命を受知遇の深き萬一も報する事能ハ
 ず假令國亡び家破るハ其我ハ身を殺して本も報せん焉ん
 を不忠不孝の事をせんとして此より虛病して出ざりけり姜
 維ハ表を上て後諸將を集め我今魏を伐んとす何くより攻
 からんかと廖化も向つて問ければ廖化曰大將軍年々師
 を出し玉ひて國中片時も安からず殊も鄧艾ハ智深く計事
 多き者あり將軍強て爲がたき事を行ハんとし玉ふ此某が
 知ざる所あり姜維勃然として怒つて曰昔し孔明六度迄祁
 山も出玉ふ此國家の爲あり我ハ又八度魏を伐一人の私もわ
 らず今先づ洮陽より攻かざるべし命も背く者ハ必ず斬ん
 とて了廖化を留めて漢中を守らせ自ら二十萬の勢を引
 て洮陽より進發す此時鄧艾ハ祁山も陣を取司馬望と軍兵
 を訓練して居たりしが蜀の勢の出る由を聞て人を遣し疑
 ぐハしむるも皆洮陽を指て向ふと申す司馬望が曰姜維ハ
 計事多き者あり虚く洮陽を取んとする体もて實ハ祁山に



出べし鄧艾曰然らず姜維實も洮陽より出ん司馬望が曰
 如何ある故ぞ鄧艾が曰姜維師を出す事ハ八ケ度いづも御方
 の兵糧多く在所より攻りハる今洮陽ハ空城にして兵糧も
 無守りの勢も無し姜維是故も其備無きを取て洮陽城を要
 害も構ひ差の勢を集めて長久を圖らん爲あり司馬望が曰
 しかる時如何して防がん鄧艾が曰是處を撤をさ兵を二
 手お分て洮陽を救ふべし洮陽を離る事二十五里にして
 侯河の小城あり是乃ち蜀の勢の洮陽へ通る喉くびあり御
 邊一手の勢を引て洮陽の城ハ入旗を假敵を息て四方の門
 を打開し人無き体ハ見せ玉へ我ハ一軍を引て侯河の城も
 埋伏し姜維夏侯霸を擒ふすべしとして盡く祁山を去て二手
 も分れて進發す去程も姜維洮陽を指て進みければ夏侯霸
 馬上おて問て曰洮陽ハ兵糧もあらず城あり將軍之を取玉ふ
 ハ如何ある故ぞ姜維が曰我ハ七八度迄師を出して皆敵の兵
 糧多き處或ハハ取ひハる地より攻りハる此故も敵も
 我ハ心を盡り知て用心をさす我思ふも洮陽の空城ハハ敵

定めて備わらじ今一息も攻取時の攻其無備也もし此城
を取時の壕を深し壘を高して漢中の兵糧を運び屯の差の
勢を備して水陸より運送し長久の計事を成ん此度勝せん
バ大なる愧あり夏侯霸が曰是妙論あり我願くバ先手進
んとして自ら洮陽の城近く推寄せ其体を窺ひ見るお四門み
を開きて人有共見へす心疑つて馬を住め左右向つて此
の敵の計事は有やと云ければ士卒告て曰更人有り共
見へ候はず纒ある百姓共の恐れ馳いで逃走あり夏侯霸自
ら馬を出して望み見る果して多くの百姓老たるを扶け
幼きを抱いて西北の方へ走りければ扱の敵用心なきを眞
の空城ありとして自ら眞先進んで壕の邊迄到りけるも忽
ち一聲の鉄炮響き四方の矢倉も喊を造りて壕の橋を拽た
り夏侯霸大驚き急お退んとする時城の上より大木大石
を抛かけ弩を放つ事雨の如くありければ憐むべし夏侯霸
五百余騎の兵と悉く壕の際まで射殺さる城中の勢是も氣
を得て司馬望自ら討て出けるを姜維後陣を引て散々に蒐

ちらす司馬望又城中へ逃入ければ姜維も城近く推寄せて
陣を取る其夜の二更も鄧艾自ら侯河の城より一軍を引て
忍び出小路を廻りて蜀の陣へ斬て入ければ蜀の勢大いお
乱れて討るゝ者數を知らず洮陽の城中も喊の聲を合せて
司馬望兵を引て打て出鑼を鳴し敵を打天地震動して夾
んで攻ければ蜀の勢一方は散乱し姜維自ら左も突右も撞
這々のがれて二十里退いて敗軍を集むるも晝夜の戦ひも
手負討死勝て數へ難く況や夏侯霸が討れたる由を聞て諸
軍皆驚き怕る姜維今退いての思くりぬべしと思ひ諸卒も
向つて申けるの勝負の兵家の常されバ大将を討れ士卒を
先ふと雖も何ぞ患るお足ん魏の勢皆此處に集りたれば成
敗の分只一戦の上も在汝等始終心を改る事勿れ誰もて
も退のんと云者有バ立所お首を斬ん張翼進出て曰魏の
勢皆此處に集りたれば祁山の必す空虚ならん將軍の此處
まで鄧艾と戦ひ玉へ某一軍を引て密に祁山を攻とり直ち
も長安へ向ふべし然る時魏の勢皆逃る路を失いん姜維

然べしとて後陣の勢を分與へ次の日侯河の城も推寄けれ
バ鄧艾も打て出て終日戦ひ暮し夜に入て互に退き夜明て
姜維又推寄せければ鄧艾城を守りて一人も出ず暮も及ん
で姜維空く退き毎日戦ひを催して櫓々も悪口すれ共鄧艾
の三日が間と出逢す城中も在て吃と心づき諸將も向つて
申けるの蜀の勢移しく討れて少しも引す毎日來て戦ひを
催すの必す勢を分て祁山を襲者成ん祁山の陣も師纂を
大将として魏の人衆を付置たれば此者計事も無れば防事
能ふまは我自ら行て救いで叶まは鄧忠の此城お留りて
心を盡して能々守れ敵たとひ寄來る共輕々しく出る事勿
れ我今夜密に祁山を救へしとて三千余騎を擇んで日の暮
をぞ相待ける姜維の諸將と計を議して居たりしが夜も入
て喊の聲大いお響ければ何事ぞと問ふ一人走り來て曰鄧
艾城を出て夜軍を籠す諸大将之を聞て出て戦んと聞け
れば姜維が曰是必大なる計事有ん妄も一人も出る事勿れ
鄧艾の鄧忠も命して蜀の陣も攻かゝらせ其身の直ちも祁

山へ向ふ鄧忠も敵の出ざるを見て又城中へ引籠る姜維諸
將を集めて申けるの鄧艾慮く夜軍する体もて實に祁山を
救はん爲あり張翼打向つて後勝負未だ聞へす我自ら行
ての叶まし傳愈こゝも留りて堅く守り敵寄する共出で戦
ふ事勿れとて自ら三千余騎を引て向ふ此時張翼の祁山の
陣を攻て魏の大將師纂を散々も打破りける所も鄧艾新し
を引て出來り後を包みて内外より攻ければ張翼大お乱れ
て谷の内も追送られ飯るべき路も如何せんも周章ふた
めく所お忽ち喊の聲地を動して魏の勢紛々として逃走る
一人張翼お告て姜將軍の勢來れりと云ければ張翼勢ひも
乘て討て出姜維と夾んで攻ければ鄧艾移しく討れて祁山
の陣も逃こもり堅く守て出逢す姜維の勝も乘て四方を圍
み息をも繼せず攻たりしかバ鄧艾既も危く今三日も堪べ
しとの見へざりけり其頃蜀の都も後主劉禪日夜酒色も
溺れて國の政事皆を佞人黃皓が料ひたり此お因て百官悉
く黃皓一人お阿り諛ひて幸せられん事を求む時に閻宇と

云者あり其身一寸の功も無て黄皓を諛ひ妄り不時を得て
右將軍を昇れり近頃洮陽の軍に姜維が打負たるを聞て黄
皓何卒闇字の威を付んと思ひ天子を奏して申けるに姜維
師を出して毎度打負今闇字と代て魏を伐しめしめ必らず
大なる功あらん早く詔を下して姜維を召回し玉へ後主昏
迷して此義に従ひ追々勅命を傳へて姜維を召れけるに
山より姜維 屢打勝て鄧艾を生取らせんと勇む處に忽ち
ち勅命あり早く師を收めて回るべしとて一日の内は三ヶ
度迄催促しければ大いお嘆いて黙止難く先傳命を告知せ
て洮陽の勢を退らしめ其後大軍徐々と引て回る鄧艾に祁
山の陣は退こめられ心憂いて居たる所は一夜蜀の陣は角
を吹鼓を打事天地を崩が如くありしうに何事あらんと怕
れ驚き夜明て人を出して見せしむれば蜀の勢一人もあ
退きたりと申す鄧艾嘆息して休す姜維が計事あらん事を
畏れて兵を制して追ざりけり
○姜維香中を禍ひを避く

姜維祁山の軍に魏の勢を打破り鄧艾を生取事一戦の上
在り勇み喜ぶ所は天子の勅命ありとて一日に三度迄召玉
へバカあく漢中迄引退き自ら成都に入て天子を見んとす
れ共後主劉禪十日余り朝廷に出で玉のざりしかバ心の内
深く怪み或日東華門にて秘書郎郤正に出逢ひ天子 詔し
て某を召返さる其故を知玉のすやと問ふ郤正申けるに是
黄皓妄り右將軍闇字を愛し彼に威を付ん爲す將軍を召
返し闇字を大將軍として魏を伐しめんとせしが今魏の大
將鄧艾が能兵を用ひて計事多き由を開長れて其事を聞き
たるあり姜維是を聞て大に怒り宮中に入て黄皓を殺んと
しければ郤正急を引止め將軍今孔明の職を繼いで位既お至
極を昇り何とて輕々しく事を行ひ玉を萬一天子許し玉
のすん返逆の名を呼れ玉のんと制しければ姜維實もと
心を静めて我家に回り次の日後主劉禪國を出て黄皓と遊
び玉の由を開自ら五六騎の兵を引て國お入れれば黄皓之
を見て築山の陰に隠れたり姜維天子を拜し涙を流して申

けるに臣既祁山の軍を打勝て鄧艾を擒よせんと爲所
陛下一日の内は三度迄詔を下して速にお召回し玉の如
何ある故も候ぞ後主默然として居玉のしうに姜維又奏
して曰黄皓巧言令色よして専ら權を執り其讒佞ある事
帝の十常侍あり陛下遠く秦の趙高を鑒み近く張讓を
戒めとし速にお勅を下し黄皓を殺し玉の天下自ら治り
漢室再び興るべし後主笑つて宣ひけるに黄皓の實は趙走
の小臣豈に少しの權を執りも何程の事有べき昔し董允
が常お齒を切ばりて黄皓を憎しむ朕怪しく思ひしお卿も
亦何とて深く之を憎む必ず心も掛る事勿れ姜維頓首して
曰今日若黄皓を殺し玉のすん國の禍ひ近に在ん後主宣
けるに愛之欲三其生惡之欲三其死一哲人の心あり卿何と
て黄皓ほどの内官を強て殺ん事を望めるぞとて近臣も命
じて黄皓を召よせ姜維を拜して罪を射せよと宣へば黄皓
乃ち姜維を再拜し某朝夕天子に近侍して國の政を犯さず
將軍如何あれバ人の讒を信じて某を殺んとし玉を願く

バ憐みを垂玉へと云て頭を以て地を叩き涙を流して謝し
ければ姜維すべし權なく面目を失ひて退出し郤正は逢ひ
て右の趣きを語る郤正申けるに將軍必らず禍ひも遇ひ玉
ふべし將軍若し危き時の國家隨つて滅亡せん姜維が曰先
生如何ある計を以てう某が禍ひを除き國の滅亡を救ひ
玉の郤正が曰香中と云所の隴西は近して其地甚だ肥饒
あり將軍何ぞ孔明屯田の計は効つて天子は奏して香中
出屯田をし玉のざるや是一つは麥熟せば兵糧の實とし
二つは隴右の諸郡を圖つべし三つは魏の勢漢中を窺
ふ事を得し四つは將軍外は在て兵糧強く人之を妨げ謀
る事能はし五つは身の難を免れ國を保事を得玉ふべし
姜維大に喜び席を下りて拜謝し先生の教實は金玉の論を
り我之に従ひんとて次の日天子は奏して曰臣願くは諸葛
武侯の法は效ひ香中は屯田して魏の仇を防ぐべし後主然
るべしと許し玉のしうに姜維乃ち漢中に出諸大將を集め
て申けるに我八ヶ度迄師を出すといへどもいつも兵糧不

足よして大功を成事能はず今我八萬余騎よて沓中よ出張し麥を蒔て屯田の計をなし兵糧の用意備へて心靜の魏を討ん汝等久しく戦いよ苦む不如先づ兵糧の用意備らん間い退いて漢中の城を守れ魏の勢遠路の運送お勞れて自ら退き去る時我追討よして攻破るべしとて胡濟を大將として漢中城を守らせ王含を大將として樂城を守らせ蔣斌を大將として漢城を守らせ蔣舒傅僉二人よ陽安關を守らせ其餘の諸將悉く手配を定めて打立ければ姜維八萬余騎よて沓中よ陣を取麥を種て長久の計をなす魏の鎮西將軍鄧艾の姜維が沓中に出て屯田をよし四十余ヶ所よ陣屋を連ね綿々として長蛇の勢ひの如しと聞て潛よ之を伺ひ見て地形陣取の休を画よ寫して洛陽よ上せければ魏主曹爽之を見て晋公司馬昭と議するよ司馬昭怒つて申けるい姜維九たび境を侵して中國を騷動し偏よ心腹の憂をなす如何して之を滅さん買充が曰姜維能く孔明が兵法を傳へて急よの中々滅し難くらん密よ智勇の人を語らひ姜維を欺

いて刺殺させ玉へ司馬昭が曰我も常々其事を思へ共姜維を殺すべき智勇の人ありし時よ從事中郎荀勗申けるい司馬公今天下の輔相と成て道を行ひ玉ふ只よく我を本として明くよ無道の輩を伐て罪を正し玉へ争の刺客を用ひて姜維を密に刺殺と云の道あらん今蜀主劉禪酒色よ溺れて佞人黃皓權を専らにし群臣惑亂して國既よ危し姜維沓中にいて屯田するも實に黃皓が禍ひを避ん爲なり今若大將を遣して攻玉の蜀必ず滅べし若密よ姜維を刺殺し玉のん事は天下を治る公道よ非ず司馬昭が曰是れ實に妙論あり今蜀を伐よ誰を以ての大將とせん荀勗が曰鄧艾の計多して實よ大將の才あり又鍾會を副將とし玉の蜀必ず破るべし司馬昭喜び此能我意よ協へりとして急ぎ鍾會を召て問て曰今汝を大將として呉を伐しめん如何鍾會が曰君の御心本呉を伐んとお非ず必ず蜀を伐の爲あらん司馬昭大お笑つて曰汝能く我心を知れり已よ如此くある時の汝實に力を盡して蜀を伐べきか鍾會懷より一卷の繪圖を

を取出一某既に君の蜀を伐玉ふべきを圖り地理を寫して此よ在と云ければ司馬昭披き見るよ蜀を攻るの法何くよ進み何くよ退き陣を取兵糧を貯ふる處悉く書付たりしよのべに亦く喜んで曰汝實よ大將の才あり急ぎ鄧艾と共に蜀を破れ鍾會が曰願くは忠を盡して君の恩を報せん蜀を攻むるよ道筋多く分れたれば一處より進み難し鄧艾に命じて兵を進めさせ玉へ司馬昭乃ち鍾會を鎮西將軍よ封して關中の勢を領せしめ青州徐州兗州豫州揚州の勢を集め又使を馳て鄧艾を征西將軍よ封して關外隴上の勢を領せしめ鍾會と計事を合せて蜀を滅すべしと下知をおし次の日朝廷よて此事を議するよ百官皆互に面を合せて言を出す者ありし時よ前軍鄧敷と云者進み出て申けるい姜維九度び境を侵して御方兵を討れ傷を病もの多く境を守る事だふ叶ひ難し況んや山谷險難の地よ遙々と入て蜀を伐ん事い空しく人馬を費して却つて大ある殃ひを引出すべし此事決して無用なりと云ければ司馬昭勃然として大に

怒り我國家の爲よ害を除き仁義の師を出して無道の蜀を伐汝如何あれ無用の辱を搦すぞとて引出して首を刎たりしり百官皆膽を冷そ司馬昭曰百官必らず驚くべからず吾淮南を平けてより已よ六年兵甲を用意して呉蜀を伐んと思ふ事久し今日先づ謀るよ呉の國の地廣く下濕よし急よ破るべりらす不如蜀を平けて流よ順ふ勢ひよ乘じて水陸共進みなは是乃ち蜀を滅して虜を取の計あり推量するよ蜀の勢成都を守る者八九萬境を守る者五六萬姜維よ從つて屯田する者六七萬あらん我既よ鄧艾よ命じ關外隴上の勢十萬余騎を卒し直ちよ沓中を攻破らしむ姜維必ず力を盡して之を防ぎ他處を救ふよ暇あらん其間よ鍾會を大將として關中の精兵二三十萬を付密よ駱谷の細路より虛よ乘て漢中を襲えめん今蜀主劉禪昏暗よして酒よ溺れ色よ迷ふ邊城外よ破れ士女内よ震はよ其滅ん事日を計て待べしと云ければ百官皆理に伏し誠よ此の如ならん擬必ず滅べしとぞ申ける鍾會既よ鎮西將軍の職を受けて諸國

の勢を集めけるが計事の外、洩れん事を恐れ、伴りて呉の國を攻むと披露して、青州兗州豫州揚州五ヶ所より大なる舟を造らせ、大將唐咨を登萊の海近き處に遣して、存りよ舟を川窓しければ、司馬昭之を聞て、大に怪み、鍾會を召て問て曰、汝陸地より蜀を伐、何とて多く舟を造らしむる、鍾會答へて曰、御方大軍を興して、蜀を攻る由、沙汰あらば、蜀必ず呉の國を救ひを求めん、某今詐りて、兵船を造らせ、呉を攻むると披露する時、呉の國驚き、驍いで、焉んぞ蜀を救事をせんと、一年の内、蜀を平げ、今造らしむ舟を用ひて、呉を伐、豈順ちらずやと云ければ、司馬昭喜ぶ事限り、あし此時、景元四年秋七月三日、鍾會己の都を立ければ、司馬昭諸將を引て十里出で之を送る、西曹掾邵悌と云者密り、傍らの人を退けて、司馬昭を私語ける、鍾會の志、大にして、計事深き者なり、今十万の勢を引て、蜀を伐、某量、彼獨り兵權を取り、必ず宜うらざる事有ん、何ぞ別、大將を副て、同く其職を司らせ、玉はざるに云ければ、司馬昭大笑つて曰、我何ぞ此を知

らざるべき、孔明六度祁山、小川姜維九座境を侵して、御方大將を討れ、士卒を失ふ、今我鍾會を見る、計事皆我心、合へり、今日蜀を破らん事、掌の内、あり、諸人皆蜀未だ討べからずと、諫む、是心の懸せるあり、心懸する時、智勇あし、然るを強て、戦ひしむる時、必ず敗を取の道あり、只鍾會獨り蜀を伐つべしと云、是其心、懸せざれば、あり、我是故、大將として、向ひしむ、彼か志、誠、大いありと云へども、蜀滅る時、軍民悉御方、降らん、凡そ敗軍の將、不可以言、勇、亡國の大夫、不可以圖、存と云、是皆、心、膽、既、破、る、く、故、あり、蜀の人、民、悉く、恐怖の心を懷て、肯て再び、謀反せる者、あらんや、況んや、今向ふ所の中國の勢、盡く、故郷を思ふて、片時も、早く、回、り、上、ら、ん、事、を、欲、す、焉、ん、ぞ、謀、反、の、人、と、與、し、て、他、國、に、住、る、の、心、あ、ら、ん、鍾、會、も、し、野、心、を、興、さ、り、是、自、滅、を、取、の、道、あり、この事、必ず、外、洩、事、勿、れ、と、云、け、れ、ば、邵、悌、再、拜、し、て、高、論、を、伏、し、誠、と、違、大、の、計、事、あり、と、云、て、退、さ、し、ける

○鄧艾鍾會漢中を破る

鍾會 諸々の大將を集めて、軍の評議しける、手下の大將より、田續、龐會、田章、爰、彭、丘、健、王、買、夏、侯、咸、皇、甫、閻、勾、安、等、を、宗として、八十余人、護軍、胡、烈、監、軍、衛、瓘、皆、帳、下、に、集、り、け、れ、ば、鍾會申ける、然るべき、先手の大將を定め、山に遇て、路を開け、せ水を渡り、橋を架させ、大軍跡、隨つて進ましめん、誰人、此職、當ん時、一人進み、出某、願く、先鋒、たらんと云ければ、諸人之を見る、虎侯、許、褚、の子、許、儀、と、云、猛、將、あり、滿座一同、此人、あ、ら、ん、と、云、け、れ、ば、鍾、會、申、け、る、い、汝、の、虎、体、猿、班、の、將、と、して、父、子、共、名、を、得、た、り、諸將も一同、汝、から、で、り、叶、ふ、ま、じ、と、云、汝、先、鋒、の、印、を、掛、て、五、千、余、騎、と、一、千、八、の、步、武、者、と、を、領、し、直、ち、漢、中、に、進、ん、で、三、手、分、汝、中、軍、を、引、て、斜、谷、より、出、左、備、を、駱、谷、より、出、し、右、備、を、子、午、谷、より、出、させ、此、路、い、づ、れ、も、險、阻、難、難、の、地、なり、汝、兵、を、下、知、し、て、山、に、遇、て、石、を、破、水、に、臨、ん、て、橋、を、疊、み、少、しも、怠、ら、し、む、る、事、勿、れ、と、云、け、れ、ば、許、儀、命、を、受、て、其、先、進、む、鍾、會、十、萬、余、騎、を、率、し、て、巴、打、立、け、れ、ば、百、官、皆、遠、く、送、り

て之を見る、旌旗、日、を、蔽、ひ、鎗、戈、霜、を、凝、し、人、強、く、馬、壯、ん、に、威、風、凜、々、た、り、し、の、人、是、を、羨、ま、ず、と、云、者、あ、し、其、中、に、相、國、參、軍、劉、寔、と、云、者、冷、笑、つ、て、立、け、れ、ば、太、尉、王、祥、此、を、怪、し、み、馬、上、ま、て、問、て、曰、今、鄧、艾、鍾、會、兩、大、將、と、して、蜀、に、向、ふ、必、ら、ず、功、を、成、ん、と、思、ひ、玉、ふ、り、劉、寔、答、へ、て、曰、必、ら、ず、蜀、を、滅、す、べ、け、れ、共、二、人、共、再、び、都、を、回、る、事、を、得、じ、王、祥、其、故、を、問、ふ、劉、寔、唯、打、笑、つ、て、答、へ、ざ、り、しか、ば、狂、人、あり、と、強、て、問、す、百、官、と、共、ま、回、り、け、り、去、程、に、征、西、將、軍、鄧、艾、の、兼、て、隴、西、に、居、た、り、し、の、司、馬、昭、が、命、を、受、て、先、司、馬、望、を、西、羌、の、國、に、下、し、て、胡、の、勢、を、集、め、させ、雍、州、の、刺、史、諸、葛、緒、天、水、の、太、守、王、傾、隴、西、の、太、守、楊、頌、等、の、勢、を、備、し、日、を、經、て、雲、霧、の、如、く、集、り、し、り、バ、日、を、擇、んで、打、立、ん、と、す、鄧、艾、或、る、夜、の、夢、お、高、き、山、に、上、り、て、漢、中、を、直、下、に、見、俄、に、脚、の、下、より、泉、迸、り、出、て、水、の、勢、ひ、高、く、湧、き、上、ると、見、て、打、驚、き、片、身、汗、を、流、し、て、次、の、日、珍、勝、護、衛、衛、瓘、と、周、易、を、知、た、る、者、を、召、し、夢、の、吉、凶、を、占、な、い、せ、け、れ、ば、綏、邵、が、曰、易、は、山、の、上、に、水、ある、を、蹇、々、といふ、西南、に、利、あり、東北

利あらずと云り孔子の曰く蹇の西南は利あるといひて
 功有り東北は利あらずといひ其道窮るるあり是を以て案
 するは將軍必ず蜀を滅して世に稀ある成功を立玉はん但
 惜らくは蹇滞して回り玉ふ事能はじと云ければ鄧艾無然
 として心喜ばず已み及んで鍾會の方より檄文來り
 共み進んで漢中に出て合んと告げれば鄧艾急ぎ手配を定
 め雍州の刺史諸葛緒一萬五千余騎を付けて姜維の飯る路
 を塞せ天水の太守王頌一萬五千余騎を付けて左より沓中
 を攻させ隴西の太守牽弘一萬五千余騎を付けて右より沓
 中を攻させ金城の太守楊欣一萬五千余騎を付けて甘松よ
 り出て姜維の後を攻させ我身の三万の精兵を引いて跡を從
 つて進發す浩りければ諸方の早馬急を告て漢中上を下へ
 と騷動す姜維沓中お在て此由を聞急ぎ成都へ表を上つり
 左車騎將軍張翼は陽平關を守らせ右車騎將軍廖化は陰平
 橋を守せけるべし此二ヶ所の第一の要害おして若し失あ
 る時の漢中悉く破れん又吳の國へ使を馳て救ひの勢を求



玉へ臣自ら沓中の勢を引いて敵を支へ候いんと奏しける時
 に後主劉禪は景耀五年を炎興元年と改め姜維が表を視て
 大に驚き昏絶して地を倒れ玉ひけるが半時計り有て甦へ
 り例の黃皓を召て今魏の大將鄧艾鍾會大軍を引いて攻來
 り姜維表を上て急を告如何すべきと問玉へ黃皓が曰是
 盡く詐りあり何故は姜維が申事を實ありと驚らせ玉ふど
 是皆さまでの事も無は已が高名は備んとて表奏する者お
 り幸いお成都の内は年老たる神降の婆あり神を供養して
 能吉凶を知る急ぎ此者を召て問玉へ萬一も違ふ事候は
 じ從主之れお從ひ後殿は香華を備へ燈燭を連ね祭を設け
 て彼の婆を車に乗て宮中へ請ひ龍床の上お坐せしめて後
 主自ら香を焚て再拜し右の事を告玉へ彼の婆俄は髪を
 亂し跣足おして殿中を躍り廻る事數百遍又床の上お盤旋
 す黃皓奏して曰是乃ち神の乗移らせ玉ふありわたりの人
 を屏けて自ら祈念し玉ふべし後主之は從ひ左右の人を盡
 く退退け再拜して祈り玉へ彼の婆喘濁たる聲よて中け

るの我は蜀の國の地神なり陛下只太平を樂しめ何をか外
 り祈る事有ん魏の國も數年の内は盡く滅べし争か此國を
 攻る事を得ん只心を安んじて遊び樂み玉ふべしと云訖り
 地お倒れて絶入けるが半時計りおして甦へりけり後主限
 なく喜び玉ひ神の御告何の疑ひか有んとて姜維が表を用
 ひ玉はず黃金百兩錦百疋を彼の婆お賜ひ日夜酒宴をのみ
 仕玉ひける之は依て姜維追々早馬を以て急を告げれども
 黃皓之を藏して天子更は知り玉とねば諸方の合圖盡く相
 違しけるこそうたてければ鄧艾勢を分て姜維と合戦を始む
 る由聞へければ鎮西將軍鍾會急ぎ此間へ漢中を攻破れ
 どて大軍備を推て十方より進發す先手の大將許儀は勇猛
 ある事父は劣らぬ者ある故今度第一の先陣と定められ已
 が手柄を顯さん爲は眞先お進んだりけるが一つの山あり
 南鄭關と名付蜀の大將盧超と云者五百余騎を以て固めたり
 と聞へければ先此處を一息お踏破れとて諸軍を下知して
 上りける此漢の漢中第一の難處よて門の前は細き橋を渡

して下ハ岩石峭々たる深き谷あり實一夫之を守れば萬夫も通り難き處なる小殊敵の寄ると聞て矢倉の上は孔明が秘傳の連弩を張り鐵に皆毒を塗て一張は十筋の矢を放つ魏の勢遂の坂を上りて關門の前は近付ければ盧遜見すまして合圖の椰子を鳴す程こそあれ數千の弩をつるべ放つて其矢雨よりも繁ければ魏の勢わけて驥いて急お退りんとする所を大木大石を轉しうけたりしかば死する者數を知す谷の底は落て微塵ある許穢案は相違して鍾會が前出此關を通る事叶ふまじと云ければ鍾會自ら百騎計りを引て來り見るは關の上より射下す矢雨よりも繁ければ急引退く時城の上より望み見て盧遜五百余騎を卒して切て下る鍾會大驚き馬を打て走りけるが土橋を過る所馬の蹄陥入て屏風を倒すが如く倒れければ急飛下歩立お成て走りけるを盧遜聞近く追付すはや討れぬと見へけるを魏の大將荀愷引回して箭を放ちければ盧遜急所を射られて馬より倒れ落ちて死しけり鍾會之を

見て勢ひお乗て攻上れと下知して大軍を一度進めければ蜀の勢大將を討れて弩を放つべき際なく盡く散乱しければ魏の勢すき間もなく打入て了は南鄭關を乘取りける鍾會先づ荀愷が敵の大將を射て我を救ひし功を賞め護軍大將を進め鞍置馬を鎧一領添て與へければ荀愷拜謝して面目身は餘りてぞ見へたりける次は許儀を召て申けるは汝先手の大將を望し故我再三戒め山は遇ては路を開き水は遇ては橋を架後陣の勢を滞らしむる事勿れと云しよ我儘橋を通れば馬の蹄陥入て已は敵お討るべかりしを荀愷が力に依て辛き命を逃れたり汝既軍法を犯せり罪救ひ難しとて引用して斬せんとす諸大將皆告て曰許儀の罪誠お重しと申せども彼が父許褚の久しく朝廷は功勞多く其名世上お隠れおし願くは許儀が一命を扶け甘松の敵陣を破りて後功を以て罪を補ひしめ玉へ鍾會怒つて申けるは軍中の法は私すべからず我若し司馬晋公の命を背りば生てよも置玉ふべきとて了は首を斬せければ諸軍

皆震ひ怖る鍾會急ぎ兵を進め息をも繼せず攻入れれば諸人の心安うらす恨る者も多かりけり蜀の大將王念の樂城を守り毎城五千の勢ありければ魏の大勢あるを見て引籠りて出わはず此は因て鍾會乃ち前軍李輔を命じて樂城を圍ませ護軍荀愷を命じて漢城を圍せ諸將は下知して申けるは兵貴神速と云へり敵の備無お乗て速にお進むべしとて陽安關を攻かふる此關は蜀の大將蔣舒傳命二人守りけるが敵已は攻來るを聞て蔣舒申けるは魏の勢二十萬お餘ると聞おれは中々出ての勝負は叶ふまじ只能守りて防ぐへし傳命が曰いやく魏の勢多しと云ども皆遠路の疲れ武者何程の事か有べき若出て戦はずんば樂城も漢城も忽ち破るべし蔣舒未だ心決せず如何すべきと論ずる所魏の勢早門外まで攻來れりと聞おければ急ぎ矢倉の上りて見るは鍾會鞭を擧て呼りけり我今十萬の勢を引て此は來る汝等もし速かに降らば御方お用ひん若し迷を執て延引せし我忽ち踏破り一人も逃とまじ傳命

是を聞て腹を立蔣舒を留めて關を守らせ自ら三千余騎を引て驚地暗お斬て下る魏の勢皆真倒れ落され我先走りければ傳命勝お乗て追のくる所は魏の大勢又一度に取て回しければ傳命退いて關は入んとするは早敵入りて見おれぬ旗共矢倉の上は飄へり門の上より蔣舒聲を擧て我既魏は降り傳命早く降れと呼りければ傳命勃然として大お怒り恩を忘れ義お背くの賊おんの面目ありて天下の人達んと思ふぞと罵り進んで關は入んとすれば大木大石を投下して面を向べき様おさき後より魏の大勢透間も無く取り圍み逃るべき路おりしりは今は是迄なりとて左は嶺右は突おめき叫んで戦ふは三千余騎の勢残り寡お成ければ天を仰いで心の中は昭烈皇帝を祈念し臣今力盡て討死す願くは蜀の鬼お成て敵を滅さんと云て又馬を拍て敵の村雲立たる真中お窺入四方八面を斬て廻るは敵の圍いよく重り傳命速にお降れと呼りければ心怒て精神を抖擻し命を限りと戦ひけるが鎗お突れ矢

よ中りて被たる甲も朱も成人馬共疲れければ猶賊の手
よ懸らんよりいどて馬より飛をり自ら首を刎て死よけり
鍾會是よ因て陽安關を乘とり城中よ貯へる兵糧武器山
の如くありしうべ心の内大よ喜び諸軍よ恩賞を與へて暫
く人馬を思めける

○姜維大いよ劍門關よ戰ふ

鍾會既よ陽安關を攻取今夜の此處よ宿して人馬の足を
休め明日又進まんとして諸軍城中よ入て休みければ俄よ西
南の方より喊の聲天よ響いて出来る鍾會大よ驚き急よ出
て望み見るふ敵一人も見へざりしうべ心の内深く怪しみ
諸軍曉きよ至る迄睡る事を得ず次の日もし敵寄るとて馬
よ鞍轡鎧を堅めて待けれ共敢てその義も無りしかば夜よ
入て暫く休んとするよ己よ三更の比よ至りて又西南の方
より喊の聲天地を崩す鍾會色を失ひ人を出して見せしむ
るよ肯て目よ遮る者もなし夜明て四方よ人を分て伏勢や
あると尋ねしむるよ數十里ヶ間なんの疑ひしき事も無し

と申す鍾會心更よ安からず直事よ有とて四五日ヶ間返
留しけるに毎夜此の如驚りしければ喊の聲の響き齊しく
急よ出て其方を聞定め夜明て自數百騎を從へ西南の方を
見巡りけるよ向ふよ一つの山あり殺氣四方よ蓋ひ愁雲
き布て霧山の頂を隠す鍾會馬を回し案内者を召て山
の名を問ふ郷導官答へて曰是乃ち昔夏侯淵ヶ蜀の大將
黄忠よ討れし定軍山よ候鍾會心よ思々しく思ひ驚き畏
れて引回さんとそれバ何どもなく狂風吹起り身の毛も
彌立機よ覺へて俄よ喊の聲地を動し數千騎の兵風よ順つ
て追かくる魏の勢魂ひを失ひ膽を冷して周章慌き馬より
落る者數を知れ道々城中に走り入討れたる兵を點檢する
よ一人一騎も死す只手足を損ト面目を傷へる許りよ陰
雲の内より多くの人馬打て出早近付て斬よと思ひしが却
つて人を殺さず只一陣の旋風沙を吹立しにて有しと告げ
れば鍾會彌々怪み降人よ出たる蔣舒を召て此邊よ神の社
あんぢり無のと問よ答へて申けるの此ゆふりよ社一つ

も無候が定軍山よ諸葛孔明の墓あり鍾會大よ驚いて曰扱
い諸葛武侯の神靈あり我自ら行て祭んとて次の日定軍山
よ行て孔明が墓を拜し太牢を備へて祭りを成す其祭文よ
曰く

維大魏の景元四年秋八月鎮西將軍鍾會祭りを故漢の丞
相諸葛忠武侯の靈よ致して曰く帝王の傳紀と爲す盛

りわれバ哀ふるあり將相の扶持を得て以て安く以て危
ふし昔先生の隠居せる世を避れて聞ことあし昭烈の三
顧よ遇て四夷を平げんと欲し白帝の孤子を託するよ向
ふて之よ繼お死を以てす祁山よ出て武を耀かし神鬼も
知る事奇し雄師を五丈原よ屯して長星忽ち墜つ此天意
已よ劉氏を絶つ大數移り難く後主酒色荒迷して朝綱
顛よ廢る誠よ社稷崩推と月盈る時ハ則ち虧天子予よ命
じて大將也あし民を保んじ國を全ふし肝膽を照耀し決
して敢て忘らず謹んで辞を寫下し拜陳す願くハ聽納を
垂玉ハ三軍肅恐して聖徳を仰る慕ひ悲傷せざるとい

ふ事奇し望むらくハ神威を風雲よ息て以て天命よ符ひ
清氣山岳よ安んじて以て天の時よ順へ嗚呼向くハ雲せ

鍾會祭り了りければ即時風止み霧散じて清風習々細雨
濛々として暫く有て天氣晴渡りければ魏の勢會を卸で
墓を拜し盡く城中よ回りて心易く休みけるよ鍾會が見た
りし夢こそ不思議かれ其夜の三更の比俄よ殺氣凜々とし
て一人綸巾を戴き羽扇を持身よハ鶴唳を被て面ハ冠玉
の如く眉よハ江山の秀を聚め胸よハ天地の機を彌し長八
尺計り成るが神仙の如く飄々然として歩み鍾會夢心地起
て之を迎へ來る人ハ誰ぞと問ハ其人答へて申けるハ我今
朝將軍の祭を受たり願くハ一言を囑そべし漢の運既よ盡
きたるハ天命の致す所おして力及すとい申あから兩川の
民年久しく兵革の患ひよ罹りて肝腦悉く地よ塗る是豈
憐ららんや將軍國の境よ入ハ能々手下の勢お法を出して
妄りよ百姓を惱ます事勿れとて袖を拂つて去ければ鍾會

退付んとして走ると思へり忽ち驚き覺けり彌々奇異の思ひををし曉大より起て諸大將を集め夢の事共を語りて此孔明の神靈ありとて即時は下知を傳へて前軍の眞先より白旗を立てさせ保國安民と大文字を書て行所毎に安んじ人を殺せる者あらば必ず首を刎んと法を出して秋毫計りも犯す事無りしう漢中の人民其徳を懐き再拜して出迎ふ浩りしう漢城の王含漢城の蔣斌も防ぐ事能はずして門を開いて降人とあり漢中悉く鍾會を屬す是時姜維の沓中にて鄧艾が攻寄ると聞兵を揃へて待所より一番は天水の太守王領馬を出して大音上げ我今大兵百萬上將千員を揃へて二十路を配て蜀を破る姜維匹夫何ぞ速く降らざると叫り喊の聲を上げれば姜維大に怒り鎗を燃つて突てうり戦ひ三合あらざるは王領散々あ成て走りければ蜀の勢息をも繼す二十里余り追討しける所は忽然として鼓の聲地を動して一手の勢打て出たり姜維之を見るは指擧たる旗の隴西の太守牽弘ありしう冷笑つて

此等の奴原の我對手お非ず敵ちらして棄よとて又喚ひて楚たりしかば魏の勢乱れて走りけるを十里計り追ひ暫く息をつき居たる所は忽ち喊の聲天地を崩して一彪の勢殺出す眞先の旗を見れば魏の征西將軍鄧艾あり姜維又入乱れて戦ひ四方八面を窺立るは血の馬蹄も蹴たて屍の路は横たひりて討つ討れつ黒烟りを立て揉合けるは蜀の勢數度の戦ひ人馬皆疲れて然も小勢ありければ鄧艾が三萬の生手に搦られ引色も成たる所は後より王領牽弘が勢うりしう姜維急し引退く時早馬一騎後陣より馳來り甘松の陣屋を魏の大將楊欣お焼れたりと告げれば姜維大に驚き諸大將に向つて申けるは汝等我が名の旗を立て此處を退かす暫く鄧艾が勢を支へよ我此間に自ら甘松の火を救ふべしとて後陣の一備を引て甘松の陣に至りける時火焰天を焦して魏の處も火うりしうは急よ之を滅んとするは魏の大將楊欣を遣りて討て蒐る姜維會釋も亦く蒐りければ楊欣なトダの敵すべき山路を望んで逃走

る姜維急し追かけ山は攻登んとすれば大木大石雨の如くは落し掛ける故引退かんとする時先は止りて鄧艾を防せたる兵共皆散々あ成て逃來る魏の大將勝お乗て十方より取巻ければ姜維數十騎を引て圍を初抜け小山の上は陣を取て救ひの勢を侍居たり時早馬來り魏の大將鍾會大軍を引て陽安關まで攻入御方悉く破れて傳命の討れ蔣舒の降人と成る此故は漢中既お魏お取れ漢城の王含漢城の蔣斌も門を開いて敵は降り大將胡濟の漢壽城を落て成都は逃去れりと告げれば姜維色を失ひ折ては叶ふまどとて取物も取敢す其夜は鹽川の口まで引ければ向ふより金城の太守楊欣一軍を引て討てりる姜維喚いて蒐たりしうは楊欣一戦も及ばず大に乱れて逃走るを姜維急し追のけ弓を取て三度放つよ一つも中らざりしかば腹を立て其弓を打捨て鎗を燃つて突んとするは乘たる馬前足を踏さ倒せし落たりけるを見て楊欣引回して斬て蒐る姜維急し起わがり飛蒐りて一鎗突けるが楊欣が馬の腦をぐざと突

時魏の大勢回し合て楊欣を救ひ去ければ姜維又馬は打乘て追討し進む所は後より鄧艾大軍を引て取まひす姜維前後を顧る事能はず漢中の道より走らんとするは雍州の刺史諸葛緒と云者大勢にて早陰平の橋を取截たりと報す姜維四角八方を敵を受進退路無して天我を襲せりと嘆きければ副將軍隨と云者申けるは此諸葛緒は雍州の刺史よて候今此處は出たるは雍州を取ると沙汰し玉は諸葛緒驚いて急し來り救ひん其時引回して急し陰平の橋を渡り劍門關を固め玉は漢中又取返そべし姜維此義然るべしとて兵を孔函谷お打入ければ案の如く諸葛緒大に驚ろき姜維孔函谷お入たるは我雍州の虛成を取ん爲あり我預りの國を取れば天子必らず罪を正し玉ふべし自ら行て救ひんとて縋ある士卒を殺して橋を守らせ自ら雍州を指て打向ふ姜維之を窺ひ見て急し後陣を先陣とし陰平橋へ殺奔するは橋を守る勢悉く走りければ姜維敵の陣は火を付て劍門關お引退く諸葛緒は半途は出て後火の揚ぐるを見

つけ扱の計事は落されたりとて急も取て回しける時き姜維橋を過て已半日お及べりと云ければ力を失つて追ざりけり

○鄧艾嶺を越て成都を襲ふ

姜維僅の勢を引て陰平の橋を過往所より一手の勢馬烟り立て来りければ近く成て之を見るも敵より有で左將軍張翼右將軍廖化あり共喜びを成て先成都の橋を問は張翼申ける近頃佞人黃皓神降の要を天子も聽め内裏召して吉凶を問その詞を信じて將軍の表を用ひす此故は漢中も破れん事を怖れて兵を起して来る所も陽安關既も鍾會も取れたり廖化曰今四面も敵を受けて御方の兵糧通せず不如退いて劍關を守り別も深き計事を成ん姜維心未だ決せず此ふて一軍して漢中を取反さん云ける所も魏の勢十方に分れて推寄ると躁ぎければ廖化曰白水路狭うして大敵も當り難し速か退いて劍門關を固め玉へ敵若し勢を分て關を取れば我等のへるべき路あり

ん姜維之も從ひ退いて劍門關も入んとすれば俄も鼓を鳴し賊を造りて數萬の精兵勢ひも乘て斬て下る是も敵あり有で蜀の輔國將軍董厥が二萬余騎もて魏の勢を防ん爲も出たるあり今大勢の来るを見て合圖の鼓を打て四方の伏勢悉く起りしかば却つて御方あるを見て門を開いて迎へ入れ天子酒色も溺れて黃皓が讒佞を用ひ玉ふ由を語り共涙を流しければ姜維申ける諸將痛く哭き玉ふも我等が生て在ん限り國を敵も取すまじ今此要害を守りて氣力を養ひ時を待て戦ひ敵の勢次第も疲れて自ら乱るべし董厥曰此處も敵を支へたりとも成都の内一人も然るべき大將無し若敵も攻られなば都の忽ち瓦の如くも碎くべし姜維曰成都の山嶺へ谷絶て敵いかに入る事を得ん少しも心に掛べうらす時に斥候より告て雍州の刺史諸葛緒と云者適も陰平の橋を燒れて負腹を立此處へ寄來ると報じければ姜維自ら五千余騎を率して打て出魏の勢の真中も蒐入て散々も揉たりけるも諸葛緒残り少も耐

れて我先にと逃走る其路々も棄たる馬物の具足の踏所も無りければ蜀の勢之を取て甘松も棄たり物物の具を今取返しぬと喜ひ皆關上へ引入よける諸葛緒備も打あされ引退き此時鍾會も劍關を十里隔て陣を取たる由を聞自ら行て敗軍の様を告ければ鍾會怒つて申ける我鄧艾と計事を合せ汝も命じて陰平の橋を守らせ姜維が回る路を塞しむる所も何故も取遊したるぞ利さへ今又我下知も無きも兵を進めて多くの人馬を失ひしは是如何ある行ひぞ諸葛緒曰姜維計事を以て雍州も攻かゝる某之を救んとて打出たれば姜維引回して却つて橋を過去れり某此意を雪ん爲も手勢を引て推寄せ此の如くも敗軍せり鍾會彌々怒り引出して首を斬と下知しければ監軍衛瓘諫めて曰今諸葛緒罪ありと雖も此者の鄧艾が手下も屬する大將あり然るを將軍若殺し玉へ鄧艾必ず怒つて畏らく不和の基と成んり暫く命を扶けて鄧艾を待玉へ鍾會曰我天子の勅を受司馬晋公の命を領し大軍を總て蜀を伐懸鄧艾

あり共罪あらば誅すべし何ぞ不和の基と云事有ん諸大將悉く集りて再三諫めければ鍾會其一命を扶けて諸葛緒を推車も四浴陽も送り上せて司馬昭が手も渡し雍州の勢を留めて已も手下も用ひける鄧艾此の由を傳へ聞て大に怒り我鍾會と官職も高下なく殊更我の久く蜀の疆を守りて國の爲も功勞を積り鍾會如何成れば漫りも傲て我手の大將を討しけるぞと云ければ劍子鄧忠諫めて申けるの聖人も小不忍則亂大謀と云り父今大ある功を建玉ひて若一旦鍾會と不和成る時必す國家の大事を誤らん鄧艾實も汝が云所理も當れりと云て上り色を現さずと云ども心底も深く恨を含み自ら數十騎を引て鍾會が陣も行鍾會之を聞て自ら數百騎の猛將を從へて出迎へければ鄧艾心の内甚だ喜ばず共坐定りて鄧艾賀して申ける將軍早く漢中を攻取玉ひて蜀の勢悉く膽を冷す是誠も朝廷の幸あり速りも計事を定めて劍關を破り玉へ鍾會曰今劍關を破るも如何ある計事を以るべき鄧艾

固く辞して曰某不才にして争か計事を知らん鍾會再三問ければ鄧艾が曰某が愚意を以て料るふ一手の勢を率して陰平の小路を廻り漢中の徳陽亭へ出て却つて劍關を襲ひ關より西の方百里計り奇兵を用ひて直ち成都へ攻入の姜維必ず劍關を棄て來り救ん將軍其時慮も乗て進み玉い必ず全功を成ん鍾會大に喜んで曰此の計事能我意に協へり將軍早く成都を襲ひ玉へ某此處に在て合圖を待んとて酒宴數刻あ及んで鄧艾別れて回りければ鍾會手下の大將を集めて曰人皆鄧艾を計事多き者ありと云しが今日是を見るも庸才として用ふるも足す諸將其故を問ふ鍾會が曰陰平の路は嶺高く岩をびへて鳥も翔り難き處あり焉んぞ兵を進むる事を得ん若敵の勢百余人して要害を守らば彼等悉く谷の内へ飢死せん我の法は依て正道より進む圍を取ん事掌ありとて修しく雪の梯鉄砲の架を作らせ日夜を分たず劍關をぞ攻たりける鄧艾の門外より馬に乗て本陣へ回りければ諸大將皆問て曰今日鍾

會は對面し玉ひて如何ある計事候ひし鄧艾が曰我實の心を以て告れば鍾會我を侮りて芥の如くそ彼漢中を取て莫大の功ありとす我若沓中よて姜維を圍すんば彼争でか漢中を事取を得ん我若成都を取れば其功彼よりも勝るべしとて其夜陣屋を収めて陰平の小路を廻り劍關を離事七百里にして陣を取る鍾會の此を聞て冷笑つて鄧艾を愚かりとす鄧艾の計事を定めて書簡を綱へ雒陽へ人の上せて司馬昭に注進す其書曰く切は蜀寇を見るも其漢中を失つて還つて劍關を守る宜しく還よ之を乗すべし今精兵を遣して陰中より斜徑より漢中の徳陽亭を得て涪へ趣き劍關の西百里へ出て成都を去る事二百餘里にして奇兵其心腹を衝べ劍關の守り必らず還つて涪へ赴かし則ち會し軌を方べて進まん若劍關の兵還らざる時ハ川ハ涪城へ應ずるの兵寡からん軍志のあり曰く其備なきを攻め其不意も出と今其空虛を掩ハ之を破らん事必せり謹んで此上聞す

伏して希く昭察せよ

鄧艾酒簡を上せて後悉く手下の大將を集めて申ける我今慮も乗て成都を襲ひ取んと欲す汝等志を同ふし國家の爲と忠を致さば其名萬世傳へて恩賞ハ子孫の家を照べし面々能心を固して不思議の大功を立てと云ければ諸軍皆答へて曰願くは將軍の命に従はん鄧艾大に喜び先其子鄧忠も屈強の兵五千人を與へて甲盔をも披せず斧鉞を持って山路を切開かせ三萬余騎の精兵をすぐりて腰に乾飯を付長き差繩を多く用意して其端は熊手を結付たり是の岩石おんどの登り難き所を木の枝岩の稜より引掛て登らん爲の支度なり十月陰平を立て百里宛行て三千の勢を残して陣屋を作りて守らしめ頓崖峻谷鳥も翔り難き所を凡そ二十日餘りお七百里超えける是皆人の住ぬ深山おれば虎狼の號音耳も盈て松樹の風敵の喊の聲を諷る已も七百里の間數十ヶ所陣屋を造りて兵を残し置たれば今の纜も二千余騎も成て人馬悉く疲れたり進ん



て又一つの嶺あり摩天嶺と名付殊更高く岨へて一片の白雲腰を繞り岩石屏風の如く截立て人馬一足も登る事を得ず鄧艾馬より下て其邊を見るに鄧忠を始として路を開く五千の勢一所集りて啼居たりければ如何なる故ぞと問に鄧忠答へて申けるに此嶺の西の方の石壁天の岨へて路を開くべき術あり今迄千辛萬苦を経て此処迄の來りしりども力疲れて盡く此處に死せん事を哀むなり鄧艾が曰我已七百の難所を超て二萬八千の兵を遣々み殘し置ければ只二千の勢を餘せり若此嶺を越る時ハ麓ハ乃ち蜀の江油城あり仮令死すとも恨なし元より大將と士卒の情ハ兄弟異なる事無汝等志を墮さず力を盡して此嶺を越さば必ず希代の功を成て富貴共受て恩澤子孫に及ぶべし諸軍之を激されて命をすてんと勇みければ鄧艾大に喜び試み馬具を落す大牛恙なく落着て身震して立たりしハ扱ハ心安しとて自ら毛氈を以て身を包み一番轉び落ければ諸の大將も續いて落す諸軍毛氈を持さる者の

件の差繩を木の枝お着て人々の腰を綁り魚を釣上たるが如くおして兎角してすべり下り一人も誤たず已お摩天嶺を越ければ此よて暫く息を休め馬物の具を調へて進み行路の傍ら大石を立て碑の文あり上は丞相諸葛孔明親題と大文字は鑿付たりしかば近く寄て之を見るに其銘曰
二火初興 有レ人越レ此 二士爭レ衡
不レ久 自レ死
鄧艾之を讀で打驚き其石を再拜して申けるに孔明ハ眞ハ神人なり我同ト世に生れて此人ハ事さる事を恨む惜ハ哉と感嘆して山の傍ら孔明の廟と立させ祭を成て進み行向ふ大なる陣屋あり是ハ孔明世お在し時險阻あれども此處を油断せず常々千余騎の兵を置て日夜用心したりし近比後主劉禪其法を廢て此の守りをも止たりと告る者ありければ鄧艾嗟嘆して休す心の内驚き怖れて諸軍を集めて申けるに我等此處迄來れども一足も回るべき道

を前乃江油城あり早く攻取て兵糧をも使ハ一命を扶れと下知しければ二千余騎の兵共死を輕んじて江油城を攻のる

○諸葛膽大又鄧艾と戰ふ

蜀の炎興元年冬十一月鄧艾遙々陰平の險所を七百里越て直ち江油城を攻りける城の大將馬邈ハ此時已魏の大勢漢中を攻取たりと聞しりども更ハ用心する事も無此日女房李氏と圍爐裏の火を撥して酒を飲ければ李氏問て申けるに敵の大勢已漢中を攻取て邊城追々急を告然るを將軍全く患る色もあく酒を飲で笑ひ樂み玉ふ何れ故ぞ馬邈答へて曰此國の大事ハ總て大將軍姜維が身お係れり我何ぞ憂る事やらん李氏が曰く國の大事ハさる事有と此城をさ(用心)し玉ふ如何なる故ぞ馬邈が曰天子酒色を溺れて佞人費皓を重じ玉ふ我量るに國の滅亡已至れり魏の勢もし攻來らば一番出で降らんと思ふ何の用心と云事か有べき女房李氏大に怒り汝男と生れて

不忠不義の心を懷き久しく此國の恩を受けて敵を降らんと何事を我何の面目ありて汝が辱を受んやと罵り夫の顔を唾を吐掛たりしり馬邈いと静み推拭ハ顔を赤ふして閉口せり活る所ハ城外俄ハ驛動して魏の大將鄧艾二千余騎おて攻入たりと聞きければ馬邈大に驚き急門を開いて地を拜伏し哀み告て申けるに某久しく魏を降らんと思ふ心あり今幸ひ將軍を見ゆ願くハ城中の軍民を率て盡く降人と成ん鄧艾大に喜び江油城を請取て降參の勢を合せ馬邈を用て案内者とす時一人走り來り馬邈が夫人首を勒て死したりと告ければ鄧艾其故を問馬邈有の儘を語りしり馬邈其志を感じ實ハ賢女ありとて厚く葬を成しめ自ら行て祭を致し城中は斷く逗留して諸軍の氣力を養ひ陰平の路々殘し置たる勢をも盡く召し集て大勢を成ければ又涪水關を攻かゝる此時蜀の軍民鄧艾が攻來るを見て何より入たると云事を知す天より降りるの怪み到る所皆風を望んで降參す此由傳へて成

都は聞ければ後主劉禪大に驚き又黃皓を召て問玉ふ黃皓
申けるは是皆詐りよて候はん神の御告何の相違の有べき
必ず人の中事を信ありと思ひ玉ふ後主又神降の婆を召
て吉凶を問んとて勅して尋玉へども早何地ともかく逃去
けり去程又遠近早馬を打て成都へ急を告る事雲の飛より
も驚く使者連絡して絶ざりければ後主色を失ひ昏絶して
地は倒れ玉ふ文武の百官互ひ面を合せ只あられたる休
みて詞を出者無りければ卻正進み出て申ける事已急
あり早く詔を下して諸葛孔明の子を召寄共計事を議
し玉へ元來孔明が嫡子諸葛瞻字は思遠の幼より聰明
よして天子の婿となり驃馬都尉に封せられしが後父武
郷侯の爵を襲て去ぬる景耀四年に行軍護衛將軍に遷る常
不黃皓を讒佞なるを悪んで瀘病して出ざりけり後主劉禪
卻正が勸めを聞いて宣いけるは若卿が教ふ非ずんば朕此人
を忘るべしとて即時勅を下して三度迄こそ召れける
諸葛瞻急ぎ朝も出て拜謁しければ後主涙を流して宣ひけ

るの鄧艾思ひざる大軍を引て攻來り今涪城を圍と聞ゆ
成都の危き事且夕はあり卿先君の恩を思ひ朕が命を扶よ
と宣へば諸葛瞻も涙を流して曰臣父子共に先帝の重恩を
被りて陛下知遇の深き肝腦地と塗るとも報する事能はず
願くは成都の兵を起して臣は與へ玉へ臣一命を棄て戦い
を決せん後主之を聞て少し心を安んじ成都の勢七萬余騎
を圍へ玉ふ諸葛瞻之を領して一萬の勢を残して都を守ら
しめ退いて外へ出ければ尙書令黃崇申ける將軍若用
意の全く調ふを待玉は事延引して叶ふまじ早く打立て
敵を難所支玉へ若延引して敵の勢綿竹關を越るば廣み
まては防事能は速かふ行て先涪城を守り玉へ諸葛瞻怒
つて申けるは我父の兵法を傳へて軍の仕様を知らじらる
汝狼りに無用の舌を動す事勿れと云ければ黃崇哀み哭き
國の滅亡近付たり此人も頼み難しと云て退きける諸葛瞻
已軍馬を調へて誰を先手の大將とせんと云ければ一
人進み出て曰父今大權を執玉ふ某願くば先鋒たらん

諸人之を見れば乃ち諸葛瞻が長男の諸葛尚とて年既十九
歳廣く兵書を明らめて武藝兼ふ超たる者なり諸葛瞻大に
喜び即時成都を立て綿竹を望んで進發す鄧艾は此時既
涪城を攻落して人馬の息を休め馬逸を召て此國の繪圖
の無くと問ふ乃ち一卷の圖本を献つる急ぎ開き見るお涪
城より成都に至る途自六十里山川の路條甚だ險阻よして
其間綿竹關ありければ驚いて申けるは若此處は逗留し
て蜀の勢綿竹關を固めお我争り成都に入事を得ん若日
を重ねば姜維が勢後より來り來んで攻る程成は我生る事
能はしとて急お鄧忠師纂二人を呼汝急ぎ二手は分れて
日夜を分たす綿竹を攻めお我大軍を引て跡は續ん汝等
心を要て怠る事勿れ若要害を敵は取れば必ず二人の首を
斬ん鄧忠師纂命を受けて直ちに綿竹に向ひければ蜀の勢關
門の前も出て八陣を布三通の敵を撃て中央より一輪の四
輪車を推出す車の上へ一人輪巾を戴き鶴駝を被て手も
羽扇を持たるが端坐して數十人の大將左右に排列し前も

一人の大將鎗を提て馬を躍せ車の傍らに黃ある旗を立て
漢の丞相諸葛武侯と大文字を書付たりしか鄧忠師纂之
を見て遍身汗を流して申けるは孔明未だ死せず我等如
何して此勢と戦はん早く回つて此由報せんとして急お退の
んとしければ蜀の勢見濟してすはや敵の色めきたるとて
賊を造て討て蒐り追討ふ二十里余り進みけるは鄧艾後陣
の勢を引て御方を救ひ回りければ蜀の勢も軍を收む鄧艾
坐も着て鄧忠師纂を召て責て曰汝戦はずして退きし何
故ぞ鄧忠が曰蜀の陣中より孔明兵を卒して攻めくる我等
急お退のんとして此の如くお乱れたり鄧艾怒つて申ける
は仮令孔明が生返りたればとて戦はずして逃る事やある
べき汝等敵の偽りを見て何故お敗亡せるぞとて引出して
首を斬んとしけるを諸人哀んで命を乞ければ續く宥して
人を遣し敵の標を伺ひしむるは其人回り來り蜀の大將は
孔明が子の諸葛瞻あり先手の大將は其子諸葛尚と云る若
武者ありと告げれば鄧艾笑つて曰名も無ら下將一戰して

擒よせん師幕が曰未だ敵の虚實も知す必ず輕々しく進むべのらす鄧艾大に怒つて曰存亡の分此一舉あり何の疑ふ事有ん汝二人再び向つて敵を破れ若打負べ必ず首を斬ん鄧忠師幕之怖れ已事を得ずして一万余騎を従へ又綿竹に向ひければ蜀の陣より諸葛尙馬を出し鎗を燃つて精神を抖擻し大勢の中を竝立けるは魏の勢其益も當る事能はずしどろも成て見へければ諸葛膽大軍を驅て大進む魏の勢討る者數を知らず散々も成て落行けり鄧忠師幕も深手を負て道々も逃回り鄧艾に見へて軍の機を告げれば鄧艾二人が痛手負たるを見て罪を責す諸將を集めて申けるは今諸葛膽能父の兵法を傳へて兩度迄我一万余の勢を殺せり若速の破らすんば後大ある害を成ん監軍丘本が曰先鋒簡を送りて彼が心を誘ひて見玉へ鄧艾之に従ひ蜀の陣も書簡を送りければ諸葛膽披き見るは其書曰く征西將軍鄧艾書を行軍衛將軍諸葛思遠の麾下致す切近代の賢才を觀るふ公の父の如きを得ず昔日茅蘆

を出る時一言已に三國を分け利益を掃平して遂に王霸を占す古今及ぶ者ある事鮮し後六ふ祁山も出其智勇の足ざるも非ず乃ち天數のみ今後主昏弱王道已に終る艾天子の命を奉て重兵蜀を伐已に皆其地を得る止成都ありて危き事且夕あり公何ぞ天に應卜人も順ひ義も仗て來り阪せざる公を表して瑯琊王とあし以て祖宗を光耀し決して虚言せず幸ひも照鑒を存せよ諸葛膽見了りて心狐疑して決せざりければ諸葛尙側も在て問て曰父今魏も降んと思ひ玉ふり諸葛膽叱つて曰我何ぞ魏も降るべき諸葛尙曰我父の体を見るも三の疑ひあり使を陣中召入て自ら對面し玉ふ一つあり書簡を披いて再三審り見玉ふ二つあり魏も降らば瑯琊王も封ぜんと云を見て怒り玉はぬ三つなり諸葛膽之を聞て其書簡を披き破り我其子も及ばずと云て武士も命じて魏の使を斬殺し從者も首を與へて追回しければ鄧艾大に怒り自ら出て戦はんと云ふ丘本諫めて申けるは將軍輕々しく出玉ふ

事勿れ只奇兵を用ひて破り玉へ鄧艾之に従ひ天水の太守王傾隴西の太守牽弘二人も大勢を付て後の谷も伏置自ら小勢を卒て出向ふ諸葛膽之を見て自ら一陣に馬を出し魏の勢を八方へ蒐散しければ鄧艾大に亂れて引退くを蜀の勢勝も乘て追蒐けるも忽然として谷の内より二手の勢打て出三方を圍て攻たりしり諸葛膽残り少に討れて綿竹の城も洩籠り堅く守りて救ひを待鄧艾息をも繼せず推寄鐵桶の如くも取巻きければ諸葛膽計事の施べき無如何せんと言するも尙書張連曰吳の國へ使を馳て救ひの勢を求め玉へ諸葛膽之に従ひ大將彭和を使として一方の圍を破り吳の國も赴かし呉主孫休對面して事の子細を尋ね丞相濞陽興を召て申けるは吳も蜀との同盟の國あり今蜀危して事じも急なり朕坐ら視るも忍ず早く救ひの勢を起せとて大將軍丁奉も五万余騎を授けて河中春春より向ひしむ時も綿竹の城も諸葛膽日夜攻られて安さ心なく救の勢を待堪て諸大將も申けるは簡機引籠りて久

しく守るは然るべのらす快く打て出て兩方の雌雄を決すべしとて城中も諸葛尙を留め置自ら三つの城戸を推開き竊地暗も打て出壕の邊ある敵を追まくりて透間もあく追蒐ければ忽然として一聲の鎗砲を鳴し魏の伏勢四方より打て出追取込めて攻たりしり諸葛膽嘆き叫んで戦ひ左も衝右も突て立所も魏の兵數百人を打取ければ敵大勢ありと雖も辟易して引色も成けるを鄧艾下知を傳へて雨の降如く遠矢も射すくめければ蜀の勢四方もわらけて諸葛膽急所を射られて死よける諸葛尙矢倉の上より父が討れたるを見て馬も乗打出んとするも張連諫めて申けるは敵勝も乘て大勢あり必ず輕をしく出玉ふも諸葛尙大に嘆いて曰我父子共も國の厚恩を受て只恨らくは悪人の黄皓を殺さずして斯る禍ひを引出せり今命生ても詮あり快く打死して黄泉の下も父も見へんとて馬を飛ばして大勢の中へ蒐入亂軍の中もて切死よぞしたりける鄧艾其忠義を憫んで父子の屍を一所も葬り綿竹の城も亂れ入

ければ蜀の大將張遵、李球等一軍を引て打て出遂に一人も残らず討死して名を滅亡の跡に遺せり。鄧艾の總竹の要害を取て今ハ手よさわる者あらじと喜び成都を取んと評高す。

○蜀主劉禪輿輓魏に降る

去昔ハ諸葛孔明討れて綿竹破れ魏の勢成都の内へ攻入と沙汰ありければ遠近上を下へと騷動して老たるを扶け幼あさこ抱て東西へ逃げ迷ひ泣號震天地を動す。後主劉禪此を聞て膽を冷し魂ひを失ひ文武の臣を集めて如何せんと言ひ玉ふ。群臣皆申けるハ今兵寡く大將足らずして戦ふべからず。質なし不如速く成都を棄て南中の七郡に走り險阻を固めて敵を支へ南蠻の勢を借て此難を免るべし。光祿大夫譙周が曰必ず南中へ行べからず南蠻國久しく王化は叛きて貢物を獻らず況んや常に恩を與へたる事無きよ今之を頼みて其國へ入り却つて大なる禍い。遂に群臣又議して曰吳と蜀の同盟の國あり今事火急あり早く吳の國

へ行て難を避ん譙周又諫めて申けるハ古より他の國を借て天子たる事を聞ず臣量るハ魏必ず吳を滅さん吳必ず魏を滅す事能ハじ今若吳は降りて臣と稱し玉ふ時は是蓋の一つあり吳後に若し魏ハ滅され亦再び魏は事へて臣と稱し玉ハ是蓋の上の蓋なり今陛下魏は降り玉ハ魏必ず國を分て陛下を封せん然る時の上ハ宗廟を守り下ハ百姓の苦を免れ玉ふべし。決して吳ハ降る事有可らずと云ければ後主憂へて決する事能ハず退いて後宮へ入玉ふ次の日衆議區々として更ハ決せざりければ譙周事の急あるを見て上疏して諫め争ふ。後主遂は譙周を諫は従り魏ハ降らんと宣ひしハ群議是ハ一同せり。時ハ屏風の後より一人躍り出て大音擧げ譙周を罵つて生を偷む腐れ儒者焉んぞ社稷の大事を知ん古より今に至るまで降參の天子と云事を聞ず先此賊を斬て棄よと自ら出て戦はんと呼りければ後主之を見玉ふ。第五の皇子北地王劉禪あり後主大ハ叱つて今群臣の議論一決して魏ハ降りて身を安くせ

んとす汝獨り血氣の勇を恃んで如何あれば出て戦ハんと申ぞ。滿城の内ハ血を流さん爲うと宣ひければ劉禪答て宣ひけるハ昔先帝世お在せし時譙周遂は政は干す今妄りハ朝廷の大事を議す是皆狂言として用るハ足らず臣量に成都の軍勢を敵方あり姜維大軍を卒て解關ハ屯す若魏の勢の都を攻るを期ハ必ず來て救ふべし其時内外より夾で攻る程あらばなごり勝すと云事有ん何故ハ腐れ儒者の狂言を聞て輕々しく先帝の基業を棄んとい思し召候ぞ降參の事必ず止り玉へと云玉へハ後主怒つて宣ひけるハ汝小兒の分として何ぞ天の時を知事を得ん。叩りハ舌を動さ事勿れ劉禪頭を以て地を叩き大ハ哭ひて申されけるハ若勢ハ盡力窮りなば父子群臣城を枕として快く戦ハ一人も残らず社稷ハ死して泉下まで先帝ハ見ゆべし安んぞ賊徒ハ降りて膝を屈する事有ん後主愈々怒り近臣ハ命じて抱出せと宣ハば劉禪殿より躍り下哀み哭ひて地ハ倒れ我先帝容易ハ基業を開き玉ふはばらす今一旦之を棄我

死す共敵ハ膝を屈めて辱を受べからずと呼り玉ふを近臣遂ハ宮門の外ハ引出す。後主乃ち譙周ハ降參の書を作せ侍中張紹、駙馬鄧良を使とし傳國の玉璽を持せて鄧艾ハ降參を請せらる。此時鄧艾ハ雒城ハ陣を取成都に入んと議する所ろハ城外ハ降參の旗を建たりければ心の内ハ深く喜び毎日屈強の精兵數百騎を卒いて成都の様を伺ひ見る。暫く有て譙周等來りて降參を求め地ハ拜して傳國の玉璽を渡し後主の降書を出しければ鄧艾開き見るハ其書に曰く

降臣劉禪謹んで書を征西將軍の麾下ハ致す切ハ聞く杯勺の水ハ終ハ江河ハ歸す燕雀の徒ハ必らず梁棟ハ棲ひ念ふハ禪等江漢ハ分限ハ深遠ハ遇値ハ借ハ蜀土ハ縁て一隅ハ斗絶ハ手ハ犯同ハ遭て漸薄として載ハ歷遂ハ京畿の攸ハ萬里ハ隔つ毎ハ惟ハ黃初中ハ文皇帝虎牙將軍鮮于輔ハ命ハ密温の詔書を宣て三好の恩を申し門戸を開示ハ大義炳然として否德暗弱竊ハ遺緒を貪りて僥

仰して紀を累ぬ未だ大赦の率ハ天威既に震ハ人鬼歸順の數王の師を怖駭し神武の次々所敢て面腹を草めず以て命を從ふ輒ち群師を艾を投げ甲を釋され官府帑藏一亦毀る所亦し百姓野亦布き餘糧亦積以て後來の思を俟つ元元の命を全ふし伏して惟みれば大魏徳を布き化を施し宰輔伊周含覆疾を藏ひ謹んで私署の侍中張紹光祿大夫譙周駙馬都尉鄧良を遣して璽綬を齎奉つり命を請て誠を告ぐ敬んで忠款を輸す存亡勅賜惟之を職する所の輿輓近きま在り復讐陳せず乞ふ將軍昭察せよ鄧艾見了て玉璽を請取り回簡を調べて重く使を持成ければ譙周張紹等皆拜謝して城中又回り右の繩きを奏し申せば後主回簡を披き見了りて大に喜こび大僕蔣顯を劍門關へ遣して姜維等降參の事を告させ尙書郎李虎も命じて蜀中の簿書を鄧艾が方へ送らしめらる凡家數二十八万男女九十四万人軍兵十万人二千八百人官吏四万人兵糧四十万石金銀二十斤綿繒絲絹二十万匹其外庫内は積貯はへたる物幾



千方と云事を知らず盡く鄧艾が手は屬す北地王劉瑁の天子既降人入玉ふと聞て怒氣天を衝て憤激し劍を帯て後宮入玉へば其夫人崔氏怪しみて問て曰く大王今日顔色常ならずる何ある故ぞ劉瑁答へて曰く魏の勢既近付ぬと聞て天子懼れて降參の書を送り明日君臣悉く降人と成り漢の社稷是より長く滅ん我れ先自害して黃泉の底まで快く祖父を見へんと思ふなり焉ぞ賊徒の爲よ膝を屈ん崔夫人の曰く嗚呼賢ある哉其死道は當れり妾願くば先立申さん劉瑁の曰く汝の女おれ死せず共害なるべし崔夫人の曰く大王死して父も事へ玉ひ妾死して夫も事ふ其義皆當然あり夫亡て妾獨り生き残り残らんやとて柱を觸て死ければ劉瑁劍を拔て三人の子を刺殺し崔夫人の首を提て照烈皇帝の廟に詣り地を拜伏して申されけるハ臣が肝膽祖父明らよ知玉の只基業の一旦は他人の物と成事を羞とす此故に先妻子を殺して妄念を散じ又臣が一命を將つて祖父を報ず祖父若輩有らば臣が心を察し玉

へとして眼中血を流して哀み哭き自から首を刎て死玉ひける蜀の人民之を聞て涙を流さずと云者無し後主劉禪是由を聞玉ひて其屍を葬らしめ次の日魏の大軍既成都を亂れ入れれば後主自縛して死人の輿に乗太子諸王其外群臣六十餘人を伴ひて北門の外十里餘り出て降人と成玉ふ鄧艾之を請取て其縛を解免し輿輓を燒て同車して入れれば成都の人民香華を備て出迎ふ鄧艾先劉禪を驢騎將軍封ト嫡子劉瑁を奉車都尉とし諸王を皆駙馬都尉とし文武の群臣悉く高下は從つて官を授け舊の宮中を回らしめて榜を出して民を安んト倉庫を交割して太常張陵別駕張紹二人も命じて諸処の將士を招き降らしめ又劍門關も使を馳て姜維が降參を催し黃皓が讒佞もして國を亂りしを惜み生取て殺さんとせしは黃皓密に鄧艾の大將を金銀を賂て縲ひ命を死れたり嗚呼此の日何ある日ぞや炎興元年十二月一日と申す漢朝四百餘年の天下乍も滅て魏の爲は併吞せられたる事こそ淺猿けれ

○鄧艾鍾會大い功を争ふ

去程、鄧艾、蜀門關の破れたるを夢にも知ず、姜維尙蜀の勢二十万と卒して、鍾會を支へ戦ひける所、太僕蔣顯來り、劉禪の命を傳へて、降参の事を告げれば、姜維大い驚き、魂ひを失つて昏絶し、諸の大將士卒も、恨氣天を衝て、牙を咬目を怒らし、鬚髮さうさ文に豎あがりて、皆刀を拔て石を砍大い、叫んで申ける、我等此如く力を盡し命を棄て戦ひんとする、天子なるとて、早く降り玉ふぞとて、哭き哀ひ聲遠近響く、姜維之を見て、心の内思ひける、是程運の協ぬを知り乍も人の心猶漢を思ふて、此の如く哭く我如何も深き計事を運して、再び蜀の都を取返さんとて、密に耳を附て、諸人計事を合せ、蔣顯、成都の機を問ひ答て申ける、鄧艾既、成都に入と沙汰有ければ、天子自傳して降人に、出玉ひ文武の百官、皆戈を倒し、蓋を卸て拜伏す、鄧艾之を請取て、盡く大第を定めて官を授け、某を以て將軍を招し、姜維密に喜び、蜀門關の上、通く降参の旗を立てさせ

先魏の陣へ使を遣して、姜維、張翼、廖化、董厥等蜀の勢を引て、軍門を降を乞と云ければ、鍾會、斜みらず喜び、急ぎ人を出して迎へしめ、姜維何とて今迄遷参せると問ければ、姜維涕を流して曰、國家の事統て某一人の身、係れり、今日おと降るも、猶早しと存する、余り鍾會此の詞を奇ありとし、て席を下て禮を重じ、左右を顧みて申ける、姜維が才の如き、誠、中國も稀ある名士ありとて、酒宴を設けて持成ければ、姜維申ける、某久しく將軍の徳を慕ふ、淮南の合戦より後、しきり大いなる計事を成玉ひて、司馬晋公の盛あるも、皆將軍の力あり、某此故、願を延て來り降る、若鄧艾、あらば某命を棄て、戦ひ死せん、何ぞ彼が爲、膝を屈めん、今將軍、從ひ奉る、某、元よりの願あり、鍾會此言を聞て、心の内、大い喜び、箭を折て誓をあし、共兄弟の交りを結んで了、姜維、大將軍の印をも取納めず、猶舊の如く蜀の勢を總べ、司らせければ、姜維密か、漢の天下再び興るべしとぞ喜びける、此時成都、鄧艾都を取たる功、傲り鍾會が

漢中、取たるは十倍せりと、思ひければ、先已、手下の大將、悉く官爵を授けて、師、益州の刺史とし、牽弘、王領等、も州郡を分ち、與へ、綿竹、益を築いて、已、手柄の程を露し、蜀の大將を集て、酒宴を催し、半酣に至りて、申ける、汝等今我、遇、大いなる幸なり、若鍾會、あんど、此處を取れば、汝等一人も、残さず殺さるべし、諸人皆拜謝しければ、鄧艾又申ける、姜維、只一時の勇士あり、常、師を出して我と戦ひ力を料すして、了、此の如く、困窮せり、蜀の大將之を聞て、皆鄧艾が徳を感、下ければ、鄧艾心の内、深く喜び、心、靜り、人々を懷て、後謀叛を起さんとせる所、存有り、時、蜀門關より、蔣顯、回、姜維、既、蜀の軍勢を引て、鍾會、降れりと告げれば、鄧艾、深く鍾會を怨み、洛陽へ使を上せて、司馬昭、書簡を送る、其書、曰く、

先魏の陣へ使を遣して、姜維、張翼、廖化、董厥等蜀の勢を引て、軍門を降を乞と云ければ、鍾會、斜みらず喜び、急ぎ人を出して迎へしめ、姜維何とて今迄遷参せると問ければ、姜維涕を流して曰、國家の事統て某一人の身、係れり、今日おと降るも、猶早しと存する、余り鍾會此の詞を奇ありとし、て席を下て禮を重じ、左右を顧みて申ける、姜維が才の如き、誠、中國も稀ある名士ありとて、酒宴を設けて持成ければ、姜維申ける、某久しく將軍の徳を慕ふ、淮南の合戦より後、しきり大いなる計事を成玉ひて、司馬晋公の盛あるも、皆將軍の力あり、某此故、願を延て來り降る、若鄧艾、あらば某命を棄て、戦ひ死せん、何ぞ彼が爲、膝を屈めん、今將軍、從ひ奉る、某、元よりの願あり、鍾會此言を聞て、心の内、大い喜び、箭を折て誓をあし、共兄弟の交りを結んで了、姜維、大將軍の印をも取納めず、猶舊の如く蜀の勢を總べ、司らせければ、姜維密か、漢の天下再び興るべしとぞ喜びける、此時成都、鄧艾都を取たる功、傲り鍾會が

臣、艾、切、謂ふ、謂ふは、聲を先、おして、實を後、おする事、わり、今、蜀を平、くるの勢、又、因て、吳を乘る、の、吳人、震ひ、恐し、此、席の如く、捲の時、あり、然れども、大、擧の後、將士、疲勞、兵、便ち、用、ゆべ

からず、且つ之を徐緩し、隴右の兵二萬蜀の兵二萬を留めて、盪を表て治て、興し、軍旅を、あして、用を要し、舟船を造りて、預じめ、流に順ふの事を爲して、然して、後、使を發して、告る、利益を以て、せり、吳、必らず、化、服せん、征せずして、定めつべし、今、宜しく、厚く、劉禪を侍して、以て、孫休を致し、士民を安んじて、以て、遠人を來らしめ、便ち、禪を、京師、送、が、如く、バ、吳、以て、流徒と爲して、則ち、化、向ふの、心、ろ、よ、汗、りて、勸、す、且、權、又、停、留、して、來、年、冬、月、の、頃、を、須、ん、然、ら、バ、吳、も、又、平、ぐる、お、足、ん、今、即、ち、禪、を、封、ト、て、扶、風、王、と、あ、す、其、費、財、を、錫、ふ、て、其、左、右、を、供、す、可、し、郡、に、董、卓、が、埠、あり、之、の、宮、室、たり、其、子、を、爵、して、公、卿、と、あ、し、郡、内、の、縣、を、食、し、む、以、て、飯、命、の、寵、を、顯、り、して、廣、陵、城、陽、を、開、いて、以、て、吳、人、を、待、り、則、ち、威、を、畏、れて、徳、を、懷、き、風、を、望、んで、從、ん、

して官を受大い諸軍を持成ける時、監軍衛璠の密司馬昭が内通の書を得て、鄧艾に向つて申ける。將軍今大なる功を立玉ひ万人皆威を畏れて忠を妬む事必ず心の儘よし玉ふ事勿れ萬づ洛陽へ訴へて司馬公の命を受けて後行ひ玉へ鄧艾が曰、大將外に在ての君の命も用はずと云り我今蜀を平けて人の心未だ附ず呉の蜀と同盟あり若禮は抱りて方づ洛陽へ訴へて後を行んとせば必ず事の機會を誤らん兵法も進んで不レ求レ名退いて不レ避レ罪と云り我事の宜きも從つて國を治む何ぞ每事問べけんやとて又書簡を副へて司馬昭を送る是頃洛陽の小兒いづくともかく云傳へて鄧艾を取て謀反せんとする工み有りと汰沙しければ司馬昭心の内疑ひを成時、成都より使來り鄧艾が書簡を献りければ司馬昭披き見る、其文の意極めて放みして自ら宜きも從つて國を治んどありし、くバ以の外も驚き左右も向つて今鄧艾漫も功お傲りて謀反の色既に露れたり如何すべきと云ければ賈充曰、鍾會が名を加へて鄧

艾を壓玉へ司馬昭是も從ひ鍾會が官を進めて司徒封ト密に監軍衛璠を命じて鄧艾鍾會逆心の企てを伺ひ料らしむ鍾會官を受けて大いに喜び姜維を召て申ける。鄧艾の功我が上よりあり此故も太尉の職も封せられたるを我深く恨とす今司馬公既も鄧艾が謀反せん事を推て我を司徒封トて鄧艾が壓とし衛璠を命じて其企ての機を伺ひしめ玉ふ御邊は時いりある高論のある姜維が曰、鄧艾の本農人の家も生れ常も牛を養ひ鋤を擲ふて長く貧賤を苦む名門世祿の子あわらざる故も物の大体を知らず今幸ひも陰平の小路より出る事を得たりと中せ其木の根岩稜お掴付腰も繩を着て魚を釣わけたるが如くわして遣々越て成都も入事を得たれども元來長計より出ざるもあらず此皆魏の天子の洪禍も頼てあり將軍若某を劍門關もて拒き玉はずんバ鄧艾悉く陰平の谷もて餓死すべし彼が成都を取たるも實に將軍の功あり今又劉禪を扶風王も封せし、此蜀の將士を懐ん爲なり其謀反の心明くお露れたる司馬昭公の

疑ひ玉ふ事誠もよく當れりと云ければ鍾會大いお喜び姜維も心の内は漢室再び興るべしと嬉しくて又鍾會に向つて申ける。暫く左右の人を退け玉へ申べし事あり鍾會是も從ひ何事ぞと問ふ姜維袖の内より一巻の圖本を取出し昔し諸葛孔明草の蘆を出る時之を先帝も献つりて曰、益州の地の沃野千里民殷んは國當て霸王の業を成べしと先帝之も因て此國を創玉へり只今鄧艾成都もわたり爭り謀反の心起らざらんと云ければ鍾會喜んで披見し山川の要道をも問ふに姜維一々お指教ゆ鍾會愈謝して問て曰、今如何なる計事をを用てか鄧艾を除くべき姜維が曰、司馬晋公元より深く鄧艾を疑ふ此時も乘て將軍早く表を上て彼が謀反の企てある由を告玉へ然る時、司馬公必ず將軍お命して鄧艾を伐しめ玉ふべし候なり某力を盡して一舉して擒め致すべし鍾會然るべしとて洛陽へ人を上せて鄧艾謀反の企て有て心の儘も事を行ひ蜀の將士を結び懐くと奏しければ魏の羣臣大い驚く鍾會又中途も二人を伏て鄧艾

が往來の便を捕へて書簡を傲り放まざる体も書改め鄧艾が使と号して洛陽へ上せければ司馬昭披見て其無禮なるを怒り自ら蜀も行って鄧艾を討んとす時、女房王氏諫めて申ける。我能く鍾會が心を知れり利欲に心迷いて義を忘れ恩も背く者あり今頻りも鄧艾が謀反を告ると雖ども其言深く信難し能々事の機を聞定め玉へと云ければ司馬昭笑つて曰、我何ぞ之を知らん元來鍾會が野心有事を知ら故も自ら蜀も趣くありとて次の日鄧艾を伐と披露して賈充も三方余騎を付て斜谷より蜀も入しめ自ら魏主曹奐を請して共も長安へ打出る時、西曹の掾郭悌密も來りて申ける。鍾會が手下の勢も鄧艾より多き事六倍なり何ぞ鍾會も命じて伐しめずして自ら遙々と下り玉ふぞ司馬昭笑つて曰、汝已前の言を今も忘れたる久しよして鍾會必ず謀反せんと云すや我今自ら下るも鄧艾を討ん爲めあらず實に鍾會を討ん爲めあり郭悌笑つて申ける。某既お此事を知て試みも尋ね申あり必ず他人も洩し玉ふも司

馬昭が曰我信義を以て人を用ふ人必ず我を信ト買充の蜀
 又入らんとて此時已に打立けるが心の内は鍾會が謀反せ
 ん事を疑ひ又司馬昭を見へて鍾會今鄧艾が逆心ある由を
 告ると申せども某の深く鍾會を疑ひ申ありと云ければ司
 馬昭が申けるの今汝を大将として蜀へ入しむははる人
 を疑ひ我又汝を疑ふべきなり我長安を行て決断あり汝早
 く進發せよと云ければ諸人皆司馬昭が氣宇海よりも深し
 と稱嘆しけり

○姜維が一計三賢を害す

晋公司馬昭魏主曹奐を請じて長安へ出る由先達て聞へけ
 れば鍾會急ぎ姜維を召して早く鄧艾を誅するの計事を議
 す姜維が曰先監軍衛瑾を成都へ遣して鄧艾を伐しめ玉へ
 衛瑾が手勢寡ければ必ず鄧艾を殺さるべし然る時諸人
 明かや鄧艾が謀反を知て盡く將軍を屬ん那時之を伐玉ハ
 大事必ず成就せし鍾會之に従ひ監軍衛瑾は鄧艾を伐
 べき由を下知しければ衛瑾兵を引て打立んとするが手下

の大将諫めて申けるは是鄧艾が手を借て將軍を殺さん爲
 の計事あり必ず輕々しく行玉ふ事勿れ衛瑾が曰我何ぞ知
 らざらん別は自ら計事有して檄文二三十通を發て鄧艾に
 從へる魏の諸大将は觸をなし鄧艾謀反の心有るを以て我
 等天子の勅命を受けて之を誅す其餘の諸將は盡く罪をし若
 速のよ來つて我を從ふ者の舊の如く官を與ん若遅く來る
 者必ず三族を滅さんと書て四方に分ち其後權軍を用意
 して成都を指て急ぎければ次の日の曉天は檄文を見たる
 者共悉く來りて衛瑾が馬の前は拜伏す此時鄧艾の府中
 臥て未だ起す暇は數十人打入て天子の詔を受けて鄧艾
 父子を生取と呼ひるを聞て床の上より驚き起けるを起し
 も立そ忽ち縛りて權軍を乘り其子鄧忠之の何事ぞとて走
 り來るを又生取て權軍を乘り時に鄧艾が手下の者共追々
 馳せ來り上を下へと騒ぎければ鄧艾車より制して曰我
 鍾會を説ふ因て此の如く擔おせらる此天子の勅命あり汝
 等妄り狼藉せば必ず三族を滅さるべし推是するは鍾會



辛卯

必ず此よ來るべしと申ければ諸人少し静り四方を遙望
 み見るは黒烟天を掩ふて鍾會が大軍馳來り鄧艾が手下の
 勢驍を冷して八方お散乱しければ鍾會既お馳入鄧艾を責
 て罵りければ體を養ひし小兒なると此の如くあるぞと
 て馬の鞭を以て其頭を打擲し姜維も大い罵り鄧艾匹夫
 何ぞ功名を万世に立ざると云ければ鄧艾も大音擧て惡口
 す鍾會乃ち鄧艾父子を洛陽へ送らしめ自ら成都に在て鄧
 艾を從ひし諸軍をも盡く統領しければ威勢大いお振つて
 遠近皆服す乃ち姜維を召寄我今平生の願ひを遂たりと云
 ければ姜維申けるは將軍淮南を平げ玉ひてより累り大
 いかる功を立玉ひ今又蜀を治めて威震天下は露ふ此故
 民の其功を大いありとし主の其謀を畏る此の如くよして
 身を安隱せんと思ひ玉へるか昔し韓信の高祖の事いて
 さしもの忠を盡しければ其功成て後に却つて醜おせられ
 大夫種は范蠡が五湖の遊びお從がらずして卒は劍お伏て
 死よさ此二人の主暗く臣愚あるが故よ此の如くならんや

方より利害の爲しむる所あり今將軍功成名遂て大徳既ふ天
下に著る何ぞ陶朱公が五湖の遊びお習ひ赤松子も從つて
峨嵋の嶺も隠れ玉のさると云ければ鍾會笑つて曰御邊の
首極めて遠し我今年四十かれ正ふ功名を萬世も傳へて
先祖を黄泉の下も耀さんと欲す争の陶朱公も故んや姜
維が曰將軍其御意もて候の、某も多くの苦勞をさせん
と思し食からん鍾會手を打て大いよ笑ひ姜維能く我意を
知れりと云て此より日夜密に謀反の企てをぞ成たりける
姜維ハ鍾會も魏の諸大將を殺させ其後鍾會を殺して再び
蜀を興さんと思ひければ鍾會が謀反を起すを見て天の助
と喜び密に劉禪の方へ書簡を送り望らく陛下下野しの辱
を忍び玉へ社稷危くして又安く日月幽ふして再び明り
お漢室重ねて興べしと告たりける忠義の程こそ勇しけれ
時晋公馬昭自ら大軍を引て長安迄出使ひを馳て檄文
を送るを告げれば鍾會披き見るに我今司徒の郢艾を誅す
るも萬一誤ららん事を怖れ自ら兵を率して長安を陣を

取參會近きも有り此故も先報すと書たり鍾會之を見て大
いよ驚き姜維を召て申ける我手下の勢ハ郢艾より多き
事六倍せり司馬公我郢艾を容易く討べきを知玉も然るも
今自ら長安も来り玉も吾を疑ふ故からん如何計事を用
ふべき姜維が曰君疑ふ時ハ臣必ず死す此皆當然の勢ハ亦
將軍目の前も郢艾を見玉へ鍾會が曰我心既も決せり
事成時ハ天下を取ん事不成時ハ退ひて蜀の國を守り亦立
徳の如くも基業を創ん姜維の曰近頃洛陽に郭太后亡び玉
ふと承ひる將軍詐りて太后の詔を受たりと沙汰して
司馬昭が君を弑せる罪を正し將軍の大才を以て天下を席
の如くも捲玉へ鍾會實も喜び能も我が意も合へり
邊先手をし玉へ富貴必ず共ふせんと云ければ姜維が曰願
くハ犬馬の勞を致すべし但諸大將の服せざらんを畏る鍾
會が曰明日ハ正月十五日上元の佳節なれば此宮中も多く
の燈を連ねて諸大將は酒宴を勤め服さざる者あらば盡く
殺さん姜維心の内大いに喜び次の日諸將を招いで酒を過

め遊び樂んで三更の比も至り鍾會俄も盃を棄て哭きけれ
ハ滿座驚いて其故を問ふ鍾會答へて申けるハ郭太后崩涉
の時も臨んで詔を某お遣し玉ハ司馬昭大逆無道よして
南朝に天子を弑し放まよよ政を行ふ必ず魏の天下を奪
ふべし何とぞ計事を運して司馬昭を誅せよとかり諸大將
も皆久しく魏の大恩を被れり我も力を合せて此賊を討玉
へと云ければ魏の諸將互いよ面を合せてあされたる休あ
り鍾會劍を抜て大いよ怒り我も從ひざる者の立所に斬ん
ど云ければ諸人震ひ怖れて是非なく皆從ひんとす鍾會下
知を傳へて諸將を一人も残さず一間ある處も推込め番を
付て守らせければ姜維が曰今諸大將の心敢て將軍も從ひ
ず一人も残さず地の底も入て埋殺し玉へ鍾會申けるハ我
已も宮中も大いある坑を掘せ白木の棒を數百本用意せり
若從ひざる者の打殺して坑も入ん時鍾會が手下も丘建
と云者あり本ハ護軍胡烈が家人もて久しく其恩を被りし
かハ今鍾會が企を見て急ぎ胡烈も告て申けるハ宮中の大

いある坑を掘て數千の棒を用意し玉も誰も從ひざ
る者を打殺して埋ん爲あるべし必ず其心得われと私語
ければ胡烈涙を流して申けるハ我子の胡淵ハ兵を率して
城外もあり定めて活る事をも知す暗々と殺さるべし
邊若昔の恩を忘れずハ我子の方へ一ツの書簡を傳へよ我
此の如く一間ある處も推込められて死せん事且夕もあり
と哭きければ丘建が曰我心を安くし玉へ某宜敷計事を成
んとて直ちも鍾會が前も来り將軍今諸大將を宮中も推込
め玉も内外の往来通せざる故も悉く飢渴を苦む何り苦
しく候べき誰も一人を許して往来せしめ其飢渴を救
ひ玉へと云ければ鍾會もとより丘建が詞を用ひける故實
も汝が申處もあるらん乃ち汝を許して宮中も往来せ
しめん此事輕きもあらず必ず怠る事勿れと云ければ丘建
之れより憚らず往來して私かハ胡烈が使を城外へ出す使
急ぎ胡淵が陣も行て父の書簡を渡しければ胡淵大いよ驚
き遍く諸大將も觸て一處も集會り父の書簡を示して申け

るの鍾會謀反を起して已は従ひざる者を宮中へ捕置必ず
 又我等をも捕ふべし如何して之を誅せん諸將皆怒つて我
 假命令を失ふ共謀反の賊は従ひと云ければ胡淵が曰事
 延引せば叶ふまゝ来る十八日宮中へ推寄て簡樸を計
 事を成んと語る監軍衛瑾の初めより鍾會が企てを推し虚
 病して居たりしが胡淵が計事を聞て然るべしと喜び馳て
 軍勢の手配を定めて先丘建を待んで胡烈が方へ計事の機
 を告知さしむ鍾會の活る事をも知す城外へ陣を取たる
 者共をも盡く捕へて殺さんと議しけるが或夜數千の大蛇
 さたりて身を咬と云の夢を見て姜維を召て夢を語る姜
 維が曰龍蛇を夢見るの昔慶びの兆あり鍾會が曰用意す
 に備れり早く事を起すべし姜維が曰諸將皆従はず後必
 害を成ん早々先殺し玉へ鍾會之も同じ十八日の早且
 鍾と被て宮中へ入んとしければ姜維俄に心痛發りて地
 の上へ倒れ死す是れ如何よと怪しみを成所より一人走り來
 つて宮門へ失火出來たりと申す急ぎ人を遣して見せしむ

るの四方八面喊の聲大いお起りて雲霞の如くある軍勢城
 外より討て入れれば鍾會色を失つて如何せんと云ふ姜維
 既にお人心地出來て是れに定めて諸大將の爲事ならん早々
 殺し玉へと云ければ鍾會宮中へ入んとするお城外の
 大勢の早や門の内迄攻入たりしりバ急ぎ殿門を閉て支ん
 とするお宮中へ捕れたる諸大將皆屋形の上へ打登り瓦を
 取て鍾會を抛りくる事雨よりも繁ぐ死する者數を知らず宮
 門の外火焰盛に焼上りて大石大木を飛して打合せたるが
 寄手遂に殿門をも打破りて宮中へ乱れ入しかば鍾會力を
 盡して目の前より七八人を斬殺し猶大勢の中を窺はるに
 四方の矢倉より遠矢は雨の降ごとく射すくめければ丁よ
 亂れ矢は射殺さる姜維も劍を抜て敵の大勢を縦横に窺立
 けるが漢家の運盡たる故おや心痛しきり發りて堪がた
 く成ければ天を仰いて大いお嘆き我計事成す是乃ち天命
 なりと叫ひり自ら首を刎て失はける時年五十九歳あり
 此日暫時の戦ひお宮中死する者數百人も及びしりバ監軍

衛瑾大音擧げて曰鍾會既に滅びたり諸軍皆各々本陣へ回
 るべし安らふ動者の首を刎ん魏の軍勢是を聞て少し靜ま
 ると雖共姜維の屍を見て日比親を討れ子を討れたる恨を
 雪んとて争ふて寸々斬其腹を裂て腸を取出しけるよ
 腹の大き雞卵の如くあり其中より一人鄧艾も恩を受たる者
 あり簡樸も鍾會も亡び姜維も討れざるを見て夜を日し繼
 で道を急ぎ鄧艾も告んて打立ければ衛瑾之を聞つけ驚
 いて申けるの我鄧艾父子を生取て洛陽へ送る若半途よて
 鍾會姜維を滅びたるを聞かば此來りて我を殺し又謀反を
 成んとするの心起らん追手を遣して斬て棄てべし護軍田
 儼が曰鄧艾さき江油城を攻る時罪あきよ某を斬んとせ
 り某頗く追掛て斬殺さん衛瑾之を許し五百餘騎を授け
 しりバ田儼大い喜び晝夜を分たず馳て往く此時鄧艾父
 子の成都も不應の事ありて鍾會姜維既滅びたりと云ふ
 を聞取て回して綿竹へ住り居たる所より田儼飛が如く馳
 來りければ昔し我手下に屬せし者おれバ我を迎ん爲よ來



れるからんと思ひ近く成て問んとするを田積一刀と斬殺す鄧忠之を見て剣を抜て戦ひけるが大勢を圍れて丁一處めて討れおけり此を名付て姜維が一計能三賢を害すと云傳へたり其後蜀の軍民大い亂れて日夜上を下へと騷動し魏の勢四方に散て狼藉する事休ざりしが左將軍張翼も魏の大將師纂を討つ劉禪の太子劉禪壽亭侯關雲等も亂軍の中へ戦ひ死す十日餘りを経て都より賈充來り榜を出して民を安んじければ此より少し静り司馬昭の命を受けて簡雍を留めて成都を守らせ賈充の降帝劉禪を引て洛陽へ上る蜀の舊臣尙書令樊建侍中張紹光祿太夫譙周秘書郎郤正殿中督張通ばかり相從ひ糜化董厥二人の虛病して從はず了に憂いて嘆き死したるとぞ聞へし

○司馬炎受禪臺を築く

魏主曹奂景元五年を改めて咸熙と號す春三月吳の大將軍丁奉蜀を救んとて五万の勢を以て攻上りけるが蜀既滅て劉禪魏に降りぬと聞ければ半途より引回す之を聞て吳の

中書丞華歆と云者吳主孫休お申けるい吳と蜀との唇齒の國なり蜀既破れて劉禪降り臣之を聞て心の内甚だ安んず陛下も定めて哀み悼玉のん推量するも司馬昭必ず魏の天下を奪ふて後大軍を起して吳を攻ん陛下諸處守りの勢を添て深く用心し玉ふべし孫休實もとて陸遜が子陸抗を鎮東大將軍として川口を守らせ左將軍孫異を南徐の口を守らせ江の邊に數百ヶ所の陣屋を造りて大將軍丁奉を守らしめ用心嚴しくぞ見へたりける爰蜀の建寧の太守霍戈と云者建寧の城に在て成都の破れたる由を聞了る兼服して西の方を望み三日の間哭きければ手下の大將來り告て曰今成都破れて天子已に降人と成玉へり此の難爲お城を守り玉ふを速かお魏に降り玉へ霍戈涙を流して申けるい遠路相隔て主上の存亡未だ知ら魏若し降參を受て主上を重んぜば我等も悉く降るべし萬一主上を輕んじ辱めば我此城を枕として討死せん先成都の機を委く聞までは此城を出べうらす諸人其忠義を感じて曾牙を

嚙で相待處より日を経て人來り天子已に魏に降り玉ひしかば洛陽へ送り上せて魏主に見へしむと告ければ霍戈大いに怒り兵を起して追苑んと議す諸人諫めて曰蜀已に滅て君とすべき人無不如魏に降りて身を保ん霍戈已事を得ずして之の小從ひ洛陽へ表を上せて魏に降らん事を望む此時劉禪已に洛陽へ上て魏主曹奂を見へ殿階の下にお拜伏しければ司馬昭責て申けるい汝荒淫無道にして國の政を亂る其罪誅せずんば叶まし劉禪怖れ戦ひ顔色土の如く成ければ魏の群臣皆曰彼賊は罪在と申せども幸ひ早く降り其命ばかりを扶玉へど時お近臣奏して蜀の建寧を守れる霍戈と云者表を上ると報じければ乃ち披き見るは其表曰く

漢の建寧の太守霍戈六部の將守を率いて上表して曰く臣聞く人三お生ず之は事一の如く惟維の在る處にして則ち其命を致す今臣國破れ主附く死を守るお所なし是を以て質を委ぬ散て貳心ならず

司馬昭見了りて大いに嘆じ蜀は此の如き忠義の人ありと霍戈を舊の官お復し劉禪が罪を宥して安樂公と封じ住宅を與へて絹一万疋奴婢百人を賜ひ其子劉瑤并び樊建譙周郤正等を悉く侯爵と對し黃皓が讒佞にして國を亂らしを憎で了お市お出して首を斬しむ次の日劉禪自ら司馬昭が家へ行て昨日の恩を謝しければ司馬昭酒宴を設けて重く持成樂人お命じて魏國の樂を奏せしむ蜀の諸臣之を聞て悉く涙を流しけるお劉禪の笑ひ嬉んで酒を飲酒宴半及んで司馬昭又私り樂人お命じて蜀の樂を奏せしむる蜀の諸臣愈涙を咽んで哀み哭く只劉禪の少しも哀める色おなく笑ひ嬉む事初めの如し司馬昭蜀の諸臣は向つて申けるい人の無惜成の簡程も有ものか仮令孔明が再び來るとも扶け救事能はじ況んや姜維が分として争り此愚人を扶くべきとて又劉禪を問て曰汝心は本國を戀しく思ふり劉禪答へて曰此間與ある酒宴お遣て某何ぞ本國を慕はん須臾ありて劉禪坐席を起衣を更んとて出けれ

へ御正も従ひ來り何故は本國を慕すと云玉ふを尙重ねて
問玉と必ず涕涙を流して某父の墓遠く蜀の國より
此故は西を望んで心悲み日夜思はずと云事候はずと答へ玉
へ然る時ハ司馬公必ず宥して蜀へ回し玉はんと私語けれ
ハ劉禪是を覺りて又座席より出酒酌みして少し酔ける時
司馬昭問て申けるハ汝が心本國へ回らんと思へるハ劉禪
則ち御正が教たる言と陳く泣んとすれども涙出ず頻り目
を塞いで顔を皺めければ司馬昭曰其ハ御正が教たる言な
るか劉禪驚いて目を開き眞は命の如しと答へければ滿
坐皆大いに笑ふ司馬昭是より劉禪が詐なく愚痴成を知て
更に疑ふ事無りけり浩りければ司馬昭が權柄天下は靡ぬ
草木もかく魏主曹奐其名ハ天子と云ども皆司馬昭が料ひ
を受けて一ツも心も委す事無之ハ依て群臣悉く司馬昭を推
て晋王と稱しければ司馬昭則ち父の司馬懿を諡して宣
王と号し兄の司馬師を景王を号す元來女房王氏ハ王肅が
女なり二人の子を生て兄を司馬炎と号す人物魁偉にして

垂たる髮地及及び左右の手膝を過其聰明英武ある方ハ萬
人の上より出さる弟を司馬攸と申す生れ付溫和にして恭儉
孝弟あり司馬昭常ハ司馬攸を愛して兄司馬師の家を繼し
め平生人ハ語りて天下ハ元我兄の天下ありと云しハ晋王
と成お及んで已お兄の家を繼しめたれば司馬攸を以て世
子と立んとそ山濤諫めて申けるハ兄を廢して弟を立てるハ
禮ハ違ひて不吉あり賈充何曾裴秀等も深く諫めて申ける
ハ長子司馬炎ハ神武英才誠ハ超世の人表わり天下皆之を
望むハ臣の相ハ非ず司馬昭尙心決せずして世子未だ定ら
ざりければ太尉王祥司空荀顛諫めて曰古より兄を廢し
弟を立てて國を滅すもの數を知らず必ず深く慮ばけり玉へ司
馬昭之ハ因て司馬炎を立て世子とし中撫軍の職ハ任す群
臣皆申けるハ近頃襄武縣ハ晝の午の刻天より怪き人下り
身の長二丈余りにして脚跡を見れば三尺二寸髪ハ雪の如
くにして長き鬚蒼く黄ある單の衣を被て奇げある頭巾を
戴き藜の杖を携へて我ハ則ち民の王あり今來りて汝等も

告知す天下換主立所ハ太平を見るべきと云て三日の
問市の邊を往來しけるが忽然として行方なく成たり是晋
王の奇端ハ應ぜり早く十二旅の冠を被て天子の位ハ即玉
へと勸めければ司馬昭大いに喜び退いて宮中へ入けるハ
卒ハ中風の疾を受けて口を開く事能はず太尉王祥司徒何曾
司馬荀顛等を召て手を以て司馬炎を指さし忽ちハ命終れ
り時ハ八月辛卯の日あり何曾が曰天下の大事皆晋主ハあ
りとして司馬炎を扶けて晋王の位ハ上せ壘りの禮畢りて父
を文王と諡す司馬炎父の業を繼て何曾を晋の丞相と
し司馬望を司徒とし石苞を驍騎將軍とし陳騫を車騎將軍
とそ或日賈充裴秀二人を召て申けるハ昔ハ曹操若天命在
レ吾吾其爲ニ周文王と云りと聞しが此事誠にて有る賈充
答へて曰曹操世々漢の祿を食ひて人の反逆の賊ありと呼
ん事を怖れて此言を出せり果して其曹丕が時了ら漢の
天下を奪へり司馬炎が曰我父を曹操ハ比せば如何賈充が
曰先君魏を助て已て三世何ぞ曹操と同じからん司馬炎問

て曰如何ある故を賈充が曰曹操ハ功の大いある華夏を蓋
て申せども下民其威を畏れて其徳ハ懐す曹丕帝位ハ即て
徭役極めて重く人民四方ハ驅馳して片時も安からざりし
ハ宣王景王頻りハ大功を立て恩徳を施し玉ひし故天下皆
魏ハ心を服せり文王又魏の爲ハ危きを扶け暴を除き玉ひ
て功万世を蓋ふ此ハ依て晋王の位を得玉へり豈曹操と日
を同うして語らんや司馬炎喜んで曰曹丕だも漢の統を繼
我何ぞ魏の統を繼ざらん賈充再拜して曰主上將ハ曹丕が
漢の禪を受たる例に效ひ復受禪臺を造て明日魏の統を繼
皇帝の位ハ即て天下の人ハ知しめ玉へ司馬炎之ハ從ひ次
の日劍を佩て殿お上る魏主曹奐急ぎ床を下て迎へければ
司馬炎高坐して問て曰魏の天下ハ誰が力を曹奐答へて曰
皆晋王父祖の賜りあり司馬炎笑つて曰我陛下を見るハ文
ハ道と論する事能はず武ハ邦を經る事能はず何ぞ才徳わ
る人を探んで位を禪り玉ひざる曹奐大いに驚いて口を開
く事能はずりければ傍らハ在ける黃門侍郎張節怒つて

申けるハ晋王の言甚ハだ差へり昔シ魏の武帝東西ハ掃除
南北又征討して容易ヨ得玉へる天下小非今上の天子
徳ありて罪ホシ何ぞ他人に譲るべき司馬炎勃然として曰
此天下ハ元より漢の天下あり曹操丞相と成て安リ逆威
を專ばらヌし自ら魏王と稱して丁ヌ漢の天下を奪へり我
父祖三世魏を扶けて天下を一統したるハ曹氏ハ力ヌ非
曹之司馬氏ハ力あり四海悉ク之を知る我何ぞ魏の天下を
受ざるべき張節大言わけて然る時ハ汝賊ハ國を奪ふ逆賊
ありと呼そりけれハ司馬炎愈々怒り張節を引出して首を
刎させ我漢の爲に本を報す何の不可成事あらんと云けれ
ハ曹炎 涙を流して哀み告ると雖ども司馬炎急ヌ起て出
去れり曹炎左右を顧みて事已ヌ逼れり如何せん問けれ
ハ賈允曰魏の天數已ヌ盡たり陛下如何思召とも今
ハ叶ムベダらず只晋王の心ヌ逆ハ漢の獻帝の例を帯て
受禪臺を造り明日大禮を具へて位を晋王ヌ禪り玉へ然る
時ハ上天心ヌ從ひ下人情ヌ合ふて陛下無虞の禍ハ免れ

玉ふべし魏主曹奐已事を得ずして之ハ從ひ賈允命じて
受禪臺を築かせ十二月甲子の日を擇んで文武の百官を悉
く集め傳國の玉璽を捧げて司馬炎に禪りければ司馬炎
上りて大禮を具へ曹奐を蓋より下し公服を被て臣下の
列ヌ若しむ時ヌ賈充諸人ヌ告て申けるハ漢の建安二十五
年ヌ魏漢の禪りを受けて今至る迄四十五年を経たり天の
祿すでヌ終りて天命又晋ヌあり司馬氏の功德天地ハ彌綸
し四海ヌ溢る正ヌ魏の統を繼で帝位ヌ即べし今曹奐を封
じて陳留王とす行て金墉城を守り都ヌ來る事勿れと云け
れハ曹奐 涙を流して出されり司馬孚之を見て大いハ哭
き曹奐が前ヌ拜伏して臣ガ死する日誠に大魏の純臣あり
と云けれハ司馬炎其忠を憐んで平王の太宰ヌ封じけれ共
司馬孚更ヌ受す此日文武の百官皆万歳を呼で再拜し大禮
既ヌ畢りけれハ司馬炎國を大晋と号して太始元年と改め
天下ヌ大赦を行つて諫めを納る官を置き是より大いハ治
り万民皆安堵の思ハ成ふける乃ち祖父司馬懿を宣帝と

論し伯父司馬師を景帝とし父司馬昭を文帝とし七廟を建
て先祖を耀らす七廟ハ漢の征西將軍司馬鈞其子豫章の太
守司馬懿其子潁州の太守司馬儁其子京兆尹司馬防其子宣
帝司馬懿其子景帝司馬師其弟文帝司馬昭あり大禮 悉ク
定りけれハ毎日朝を設けて吳を伐の計事を相讀しける

○羊祜病中杜預を薦む

吳の永安七年吳主孫休病ヌ臥て已ヌ危クありけれハ亟相
濮陽興ハ太子孫壹を托して忽ち命終れり此時蜀の滅び
たるを聞て吳の軍民震ハ畏れける折節されハ孫壹年幼ヌ
して國を治る事能じとして左典軍萬或左將軍張布と共ハ朱
太后ヌ奏して烏程侯孫皓を立て君とすべき由を申す朱太
后此の由を聞て我ハ年老たる寡婦あり社稷の大事ハ朝廷
の大臣宜敷議せよと云けれハ濮陽興遂ヌ孫皓を迎へて君
とす孫皓字ハ元宗孫權ガ太子孫和の子あり秋七月皇帝の
位ヌ即て元興元年と改め孫壹を豫章王ヌ封し父孫和を文
帝と諡し丁奉を大司馬ヌ封じ次の年又改元して甘露と号

す吳の羣臣皆孫皓を賢才なりとして天子としけるが案ヌ相
違して位を得てより日夜酒色ヌ溺れ惡虐日々長じて民
の禍ハ甚しけれハ丞相濮陽興左將軍張布二人之を諫め
て却つて三族を滅さる懼りけれハ羣臣愈々怖れて再び諫
むる者亦ク孫皓心の儘ヌ凶暴を發して又寶鼎元年と改め
陸凱萬或を左右の丞相ヌ任じ昭明宮を造つて國の費多ク
民の哭き甚だしかりけれハ陸凱上疏して諫めて曰
今笑ハあくして民命盡ク無爲ヌして國財空し臣竊ハ之
を痛む昔漢室既ハ衰へて三家鼎の如く立今曹劉道を失
つて晋の有となる此目前の明驗あり臣愚但陛下の爲ハ
國家を惜むのみ武昌ハ土地險瘠王者の都ハならず且童
謠曰ク寧ろ建康の水を飲とも武昌の魚を食じ寧ろ建
康ハ還つて死すとも武昌ハ止まらじ是民の意と天意を
明クヌするハ足れり今國一年の蓄ヘなくして根を露ハ
すの漸あり官吏苛擾を爲ヌ之を恤む事ある事ホシ太帝
の時ヌ後宮百ハ滿す景帝より以來乃ち數年ハ是財を

耗すの甚だしき者あり是皆政事を盡し民を病しむるの
者あり願くは陛下百役を省き苛擾を罷て宮女を科び出
し百官を清選せば則ち天悦び民附て國豊からん
孫皓之を見て心の内は怒りけれ共陸凱の先朝の舊臣なる
を以て敢て色よの願さず或時卜者 尙廣と云者を召て天
下の吉凶を占りせければ尙廣が曰陛下の兆甚だ吉あり
庚子の歲青蓋必ず洛陽に入玉の孫皓大いに喜び中書丞
華歆を召て申けるい先帝の時お卿江の邊は多くの陣屋を
造りて丁奉よ之を守らしめたり朕今大軍を起して洛陽を
攻取天下を一統して劉禪が爲は難を報せんと思ふい如何
よ華歆謀めて曰臣聞成都滅びて蜀主降り司馬炎魏を奪つ
て新の業を立たりと必ず天下の大軍を興して吳を取の意
有ん陛下只徳を修めて民の心を懐け要害を固く守りて敵
を防の備を成玉へ今若輕々しく兵を起さば麻の衣を被て
火を滅んとするが如く必ず自ら焚ん陛下能察し玉へ孫皓
怒つて曰朕時に乘じて天下を定めんとす汝如何を活る不

吉の言を吐出せる若先朝の舊臣よあらずんば首を斬て法
を正すべしとて門外より追立ければ華歆大いに嘆息し可惜
錦繡江山不三久 屬他人」と云て此より隠遁して世に出ず
吳主孫皓遂に群臣の諫めを用ひず鎮東將軍陸抗を大將と
して川口より荊州襄陽を窺ひしむ晉帝此由を聞て百官を
集めて宣ひけるい先帝蜀を平げ玉ひし時鄧艾流し順つて
吳を攻んと謀す然れ共先帝之を用ひず彼が惡慮を積で自
滅する時一舉よ事を濟へんと云玉へり今却つて荆を侵す
如何して破るべき司空賈充が曰吳主孫皓無道にして政事
を理めず上下 悉く怨反く陛下今荊州の都督羊祜お命ト
て之を防しめ吳の國內變あるを待て勢ひに乘て攻玉の
一鼓して定らん晉帝之よ從ひ急ぎ勅命を得て羊祜よ敵を
防せらる羊祜字の叔子元泰山南城の人あり此時襄陽を守
て軍民其徳お懐く常お軍中よ在ても輕き裘を被て甲を
着ず護衛の兵も幾も數十人を用ひければ上下皆服せま
云者なし此時勅を受けて軍馬を調へければ諸將皆曰今敵の

機を窺ふ吳の勢皆怠り荒んで備あし一攻せめて打破ん
羊祜笑つて曰汝等皆吳の陸抗を尋常の人ありと思ふか此
人智深く計事多し先年吳主の命を受けて西陵を攻けるが歩
關を誅して其手の猛將數十人を生捕脚を全ふして國は回
りし大將なり我之よ及ぶ事能はず今孫皓よく人を用ゆ陸
抗が在ん間の我等只能守りて出る事無るべし其國中お
内變あるを伺ひ勢ひよ乘て破るべし若時を審らぬよせず
して輕々しく進まば敗を取の道なりと云ければ諸人拜服
して境を守り出て戰ふ事無りけり羊祜ある日諸將と共に
獵お出けるが吳の陸抗も同く出たりと聞て手下の諸軍を
能々戒め晉の地は獵して吳の境へ一步も入しめざりけれ
ば陸抗之を見て嘆つて曰羊將軍の勢紀律甚だ正一犯すべ
からずとて互ひよ境を越す終日獵暮して本陣へぞ回りけ
る羊祜我が陣に回り今日の獵よ得たる禽獸を點檢し若吳
の獵場より瘡を被り來て晉の兵よ取れたる獸われば皆吳
の陣よ送り返さしむ陸抗其使よ對面し汝が主の羊將軍酒

を好み玉ふかと問ければ使答へて曰美酒有れば必ず飲候
陸抗笑つて曰我よ美酒あり汝之を羊將軍お獻つり此の陸
抗が手づから造る酒なり一樽を送りて昨日獵よ出たる情
を表すと申し候へと云ければ使酒を持回りけり吳の諸將
之を怪んで何ゆゑよ敵よ酒を送り玉ふと問ければ陸抗笑
つて彼既お徳を施す我何ぞ辭ざらんとぞ申ける羊祜が使
晉の陣よ回り陸抗が云し言を告て酒を獻まつりければ羊
祜笑つて曰彼も亦我酒を好む事を知たるかとて樽を傾け
て飲んとす大將陳元と云者之を諫め敵の方より送れる物
必ず毒あらんと云ければ羊祜笑つて曰陸抗の毒を用ゆる
大將お非ず何の疑ふ事有んとて竟お盡く飲ければ諸人皆
大いよ驚く此より時々使を通じて物を送りけるが或日
陸抗が病ある由を聞吳の使來りける時羊祜對面して申け
るい汝が主の病も推量するよ我と伺ひけるべし此藥を携
へ回りて陸將軍よ飲しめよと云ければ使藥を携へ來て
陸抗よ獻つる吳の諸將 怪みをあして羊祜の敵の大將お

賢君を立ば如何して呉を取事を得ん今時を失ふべからず
晋帝が自ら悟りて卿我が爲大將と成て呉を伐んや
と問玉へ羊祜が曰臣今年老病發して此職を領する事能
はず陛下能智勇の人を擇み玉へ晋帝之を稱謝して王者の
策を計して家に歸し其年の十一月羊祜が病既急な
りければ晋帝自ら其家へ行幸して病を問玉ふ羊祜涙を
流して臣萬死も陛下の恩を報ずる事能はずと云ければ晋
帝も涙を流して宣しく朕深く卿が呉を伐討事を用ひざる
を恨む誰か卿が志を繼で呉を伐べき羊祜が曰臣今死せ
んとす忠誠を盡さずんば有べからず右將軍杜預の實も重
く用ふべき人なり陛下若呉を伐玉は必ず此人を大將と
し玉へと云も果せして息絶たり晋帝聲を放つて大い哭
き鐘に乗て宮中へ回り玉へ文武の百官も悉く涙を流す
晋帝勅を下して葬りを厚くし太傅鉅平侯の封を贈りて
自から之を祭玉ひ乃ち杜預を鎮南大將軍として荊州を守
らせらる南國の羊祜が死したるを傳へ聞て皆市を罷て哭

き哀み境を守る呉の勢も盡く涙を流して襄陽の人昔し羊
祜が常々岷山を遊びし事を思ふて山の上へ廟を建て四時
之を祭れり往來の人其廟は建たる碑の文を讀で涙を流さ
ずと云事無ししかば世の人之を墮涙の碑とぞ号しける益
州の刺史王濬吳の滅んとするを見て晋帝も表を上て伐ん
事を奏す其表は曰く
孫船荒淫凶逆宜しく速に征伐すべし若一旦船死して
更めて賢主を立ば則ち強敵あり臣某船を造る事七年
且朽敗おし臣年七十死日あし三つの者一つも乗かば
則ち圖り難し願くば陛下事機を失はざる事ありれ
晋帝大いに喜び王濬が論よく羊祜の計事を合へり朕今意
を決して呉を伐んと宣ひけるを待中王渾謀めて申ける
吳主孫船常は洛陽を攻んとする心ありて軍勢を訓練して
境に有今之を伐んとせば彼が望む處も落ん若一年も過ば
吳の勢皆疲れ苦まん其時虛に乗て伐ば一舉して功を成べ
し晋帝之は因て又止り玉ひければ鎮南大將軍杜預荊州よ

り表を上て早く時又乘じて呉を伐べき由を奏す晋帝之を
見て心未だ決せず後宮へ入て秘書張華と碁を圍玉ふ時
近臣奏して邊庭より表を上ると云ければ晋帝披き見玉ふ
又杜預が表なり今吳を伐の用意盡く備りて若中途よ
して固く孫船必ず要害を搆へて守るべし然る時江上
の險阻如何して渡る事を得ん延引せば叶ふまじき由を載
たり晋帝如何せんとな案じ煩ひ玉ひければ張華座を起て碁
盤を推のけ謹んで申ける陛下聖武にして國豊に兵強し
今吳の孫船淫逸にして賢人を殺害し國既滅んとす戦ひ
ずして平ぐべし陛下御心を決して伐玉へ晋帝限あく喜び
卿が言明らかると利害を知朕あんの疑ひのあらんとて朝廷
又出て事を議し鎮南大將軍杜預を大都督として十萬余騎
又て江陵より進ませ鎮東大將軍司馬倫を豫中より出し征
東大將軍王渾を油江より進ませ建威將軍王戎を武昌より
進ませ平南將軍胡奮を夏口より出し皆五萬余騎を杜預
が下知を聞して又舟手の大將の龍驤將軍王濬廣武將

軍唐彬二人二十萬の勢を以て攻下る又賈充を都督として黃
鉞を借冠南將軍楊濟を副都督として共に襄陽を陣を取て
諸路の軍馬を總督さしむ
○王濬計て石頭城を取る
去程は晋の大軍水陸より攻下る由吳の國は開へければ孫
船大いに驚き群臣を集めて計事を議す丞相張悌申ける
車騎將軍伍延を都督として江陵を守らせ驃騎將軍孫歆を
大將として夏口等を守らせ臣自ら左將軍沈營右將軍諸葛
灑を引具し十萬余騎を以て牛渚を固め諸方の敵を防ぐべし
孫船之は從ひ手配を定めて向ひしめ朝を退いて後宮へ入
ければ佞人岑昏問て曰陛下顔色如何なれば憂しき孫船が
曰晋の大軍水陸より攻來る陸路の敵は已に要害を支へて
防しむ王濬と云者數萬の兵船を調へて流れ順つて攻
下る其鋒甚だ鋭きあり此を防べば計事なし岑昏が曰臣一
つの計事あり王濬が船を盡く微塵も成ん孫船が曰卿如
何なる長計のある岑昏が曰元より江南の地の鐵多し今鐵

を以て長さ數百丈重さ二三十斤の鎖を造せて江の面よ之
を張又長さ一丈餘の錐を造りて水の底ふひしと立置
敵の船順風に乗じて來らん錐は當りて盡く破れん又
鎖りお支られて飛でも大江を渡得事候へん孫船大い喜
び急ぎ國中の鍛冶を江の邊に集めて日夜を分たず造らせ
て萬全の計事なりと思ひける此時晋の大都督杜預は已
江陵を出て大將周旨を召て計事を授け汝の舟手の勢八百
人を率して密に小舟に乗て江を渡り夜お扮れて樂郷を襲
ひ山林の間は多く旗を立てて晝の鉄炮を鳴し敵を打夜に諸
処は烽火を燒烟を擧て敵の心を疑ひしめよと云ければ周
旨密の江を渡り巴山と云處に埋伏し杜預水陸より進み
ければ吳の大將伍延兵を引て陸路より支へ陸路舟手を司せ
つて先手の大將孫歆一番に進み來る杜預暫く戰ふて詐り
て退さけるを孫歆勝に乗て二十里あまり追蒐ければ忽ち
一聲の鉄炮を鳴して晋の伏勢四方より起る吳の勢大い
亂れて散々走りけるを杜預勢ひお乘て敵を討事數を知

す孫歆残り少く成て巴山の城に逃入ければ晋の大將周旨
八百の兵を引て亂れたる吳の勢は難く城中に入て火を付
たり孫歆大い驚き此の處に敵はるの飛で江を渡りたる
かと云て門を開いて出んとするを周旨追蒐て一刀お切て
落す吳の大將陸景の南の岸に兵船を調へ遙に巴山は火の
起るを見て御方の勝負心元あしと伺ふ所お忽然として山
際の松陰より晋の鎮南將軍杜預と書たる旗を指出しけれ
此の如何おと膽を冷し逃れて岸より上らんとするを晋の
大將張尙馬を飛して追付遂に首を取て指擧たれば殘る
勢の十方は散亂せり吳の車騎將軍伍延の諸方の攻口破れ
たるを見て江陵城を棄て走りけるが晋の伏勢は生取れ
て了る首を刎られけり此は依て江陵城破れければ浣湘
を打通りて逕ちお黃州へ進むよ手は障る者もあく郡守縣
官未だ戰ひざる先お風を望んで降人とする杜預百姓を安
んじて秋毫も犯す事なく武昌城は攻かれば一支部せ
で皆門を開いて降を乞是より軍威四方お振つて吹風の草

を麻が如くかりければ建築を取の計事を謀するよ平南將
軍胡奮が曰吳の百年の仇根深くして盡くの服をせべから
ず殊は春水漲り來りて久しく留る事を得がたし暫く軍
を收め冬に至りて又進み玉へ杜預が曰昔し樂毅は濟西の
一戰よ齊の國の強を破る今御方威風大いよ振つて勢ひ破
竹の如し數節の後皆迎し乃而解無有不着手處として大軍
を驅て建築を攻りよる舟手の大將龍驤將軍王濬の數萬
の兵船を連ね流し順つて下りけるに吳の勢之を防ぐべき
様なく降人は出る者數を知らず時先手より報つて吳の勢
水中に鎖の錐を立長さ鎖を張て待たたり輕々しく進まば
御方の船盡く破れんと告ければ王濬お笑ひ何程の事
有りんとて大いある筏を多く造らせ草を束て人形を拵へ
弓箭兵杖を持せて夥しく筏にのせ水お順つて眞先お流
し懸たりければ吳の勢誠の人ありと思ひ我先よ逃走る
水は急かり水中お立たる錐盡く筏は懸り引取て流れけ
れば又水を得たる兵を擇んで筏よのせ長さ十丈余りの大

火炬を造りて油を灌ぎ鎖を張たる毎所お夥しく投下し
けるよ水面の鐵索盡く斷て此より路ひらけしり王濬
が大軍直ちに進んで向ふ處勝すと云事なし吳の丞相張
悌の牛渚を守りて居たりしが敵既よ攻近付と聞て先沈營
諸葛靚二人を出して戰ひしむ沈營乃ち諸葛靚に向つて申
けるに諸方の攻口皆破れて敵是迄攻入りたり只能力を盡し
て此要害よて支ふべし若こを去て江を渡り不幸よして
打負る時の國必ず滅ぶべし諸葛靚曰是實よ某の心に叶
へりどて兵の手配をそる所よ早馬來りて晋の舟手の勢流
し順つて攻下る勢ひ甚だ大いよして御方盡く破れたり
と告ければ二人色を失ひ急ぎ馳回りに丞相張悌を見へ
國既お危し早く晋よ降らんと云ければ張悌申けるに國家
將よ滅んとして賢愚之を共よす今若君臣悉く降らば一
人も國の爲よ死する者わらじ是大いある差あらずや諸葛
靚が曰存亡の自ら天數あり丞相一人いよ思し召共甲斐
あるまじ何故よ自うら死を求め玉へるや張悌涙を流し



て曰今日は是我死する日あり我幼より此國の祿を食で
 位已に丞相と昇れり國滅ば吾も共亡ん焉んぞ命を惜ん
 で不義の名を取んやと云ければ諸葛孔明も涙を推へて去ま
 けり張悌乃ち沈璧を伴ひ討殺されたる縲の勢を引て進
 みければ晋の大軍四方よりをつ取こめ周旨張尙など云大
 將我討取んと斬て斃りけるを張悌力を奮つて散々又戦
 ひ了らぬ亂軍の内死ければ沈璧も周旨も討れて殘る勢の
 四方も散て落往さけり牛渚既破れければ王濬洛陽へ人
 を上せて捷軍を奏聞するも普帝限りなく喜び玉も買充申
 けるの吳未だ盡く平ぐべからず殊更暑氣の甚だしき時
 も及んで中國の勢深く吳の境に入らば必ず疫疾を發すべ
 し暫く軍を収め時を待て討しめ玉へ滿座の朝臣皆買充が
 申處萬全の計事ありと奏しけるを張華只一人争ひ諫めて
 申けるの今官軍已に敵の巢を深く入て吳の軍悉く靡
 を治す孫皓を擒よせん事一月の内を出べりらす陛下若固
 く御心を決し玉はせんバ徒ら前功を廢すべし買充怒つ

て申けるの御邊天の時を省みず地の利を審りよせず妄り
 に兵を進めて天下の人馬を苦しめんとす首を斬ても厭事
 かし普帝笑つて宜ひけるの汝もよとて怒を發する朕が心
 も張華と同じ何ぞ争ふ事を用ひん時又鎮南將軍杜預表を
 上ると奏しければ近臣拔き讓に早く兵を進めて吳を滅さ
 ん此時を失ふべからずと書たり普帝いよ御心を決し
 刺を下して速く根を絶べき由を告玉ひしに杜預王
 濬大いに喜び水陸共進んで其勢ひ風雷の如し吳主孫皓
 此由を聞て震ひ怖れ今諸方の攻口皆破れて諸大將盡く
 討死せり如何せんとい哭きければ殿中護衛の勢數百人頭を
 叩いて申けるの北國の敵軍深く國の境に入て御方の軍民
 戰はずして皆降る是禍ひの興の依人岑昏が讒暴あるを以
 て大將も士卒も怨みを含む故あり願くば早く岑昏を殺し
 玉へ某等命を棄て敵を當らん孫皓が曰く量るも岑昏程
 の内官いりてか國を乱る事有ん諸人皆曰く陛下近頃蜀の
 黃皓を見玉はせんや孫皓が曰く然り此者の一命を助け官を

縛て奴とあさん諸人耳も閉入す宮中入打入て岑昏を拽裂皆其肉を一口宛食て快よきうなと喜ぶ此お於て大將陶澂等申けるの臣願くは舟手の勢二萬人を率し大船に乗て敵を破らん孫皓然べしとて御林の軍を調ければ陶澂是を率して前將軍張象と二手を分れて水は流るるも俄も西北の風吹て旌を立てば櫓もあく逆浪大を拍て見るも膽冷しありければ數百艘の兵船皆行方なく吹散されて只張象の別計り數十人あて残りけり昔の大將王濬の兵船を運ね帆を張て進みけるが三山を過る所お波あらく風烈しく水手楫取わいて騒ぎ此体よて渡り難し暫し風の静るを待べしと諷しければ王濬船を抜て怒り我今目前石頭城を取んとす如何恐れければとて追手の風船を留る事やある命よ背のハ断て棄んと云て了る鼓噪して大に進み吳の勢之を見て叶はじとや思ひけんいまだ戰ひざる先も前將軍張象を仰て降人と成王濬對面して申けるの汝賊も何方とあらば先手は進んで城を破れ張象乃ち手勢を引て

吳先に進み直ち石頭城は行て門を開と呼りければ内より伊方回りぬとて門を開きけるお普の大軍盡く乱れ入火を掛喊の聲を擧げれば吳の勢防ぐべき力なく盡く降人と成吳主孫皓の自ら首を刎んとしけるを中書令胡冲光祿勳薛瑩急お押し申けるの君あんなを安樂公劉禪は效ひ普は降りて身を保ち玉のざる孫皓之に従ひ遂に興糧を備て君臣皆自縛して降人お出ければ王濬之を請取て其繩を解ゆるし國中の屬籍を納て吳の四州四十三郡三百三十三縣家數五十二萬三千軍吏三萬二千軍兵二十二萬男女老少二百三十萬米穀二百八十八萬石兵船五十餘艘御宮の美女五千余人悉く王濬が手お屬を浩りければ陶澂も戦かはずして破れ次の日陸路の寄手鎮東將軍司馬伯建威將軍王戎等盡く來り集り翌日杜預又來り大お諸軍を賞し倉を啓て百姓を賑しければ吳の軍民皆安堵して平定せり吳の建平の太守吳彦の城を守て如何も攻れ共落さりしお國の滅ひたるを聞て城を出て降りしりの王濬其忠義を感じ

天子は奏して金城の太守とす普帝吳の滅びたる由を聞て群臣と賀を奇し盃を擧て宣ひけるの此皆羊祜が力なり惜らくは直も吳の滅ひたるを見せしめざる事をとて涙を流し玉へは群臣皆默然たり吳の驍騎將軍孫秀の國の滅びたるを見て南を望んで大に哭き昔し討逆將軍孫堅年壯ある時纔ある校將の職より此國を開て王業を創め玉ひしよ今孫皓盡く之を廢悠々たる蒼天此何人ぞやと云て涙を流す時又太康元年夏五月江南盡く定りければ王濬師を取めて洛陽へ回り孫皓を引て天子お見しむ普帝坐を賜りて朕此の座を設て卿を待事久しと宣ひければ孫皓答て申けるの臣も南方よ於て此座を設て陛下を待事久しかりき普帝大に笑ひ玉ひければ買充傍も在て問て曰く孫皓吳お在て人の面を剝或の眼を鑿れりと聞しお如何ある罪をり此の如くの罰し玉ひし孫皓答て人の臣として君を殺し奸佞おして不忠なる者を皆此の如く刑を用ふと云ければ買充心蓋て赤面す普帝酒宴を設けて吳の君臣を持成孫

皓を假命公と封じて其子孫封を中郎と任じ丞相張悌が忠義も死したるを憐んで其子孫を重く賞し王濬を輔國大將軍と封じ其餘の將士悉く恩賞ありて天下大に定まる蜀主劉禪普の太康七年も薨と魏主曹奐太康元年も薨じ吳主孫皓太康四年も薨じ此より三國晉帝も歸て司馬炎一統の天下とあり万民無爲の化お服し四海初て太平を樂む事こそ目出度けれ

繪本通俗三國志卷之五十終

繪本通俗三國志

大蘇芳年口畫

全十七冊

繪本忠義水滸傳

同

全十八冊

繪本西遊全傳

同

全四冊

繪本金瓶梅

同

洋綴銅版畫全一冊

繪本漢楚軍談

同

全八冊

繪本太平記

同

全十四冊

明治十七年六月十一日出版御届

東京府平民

清水市次郎

芝罘岩下町四丁目三番地

武田平次

長谷川町一番地

菱花堂

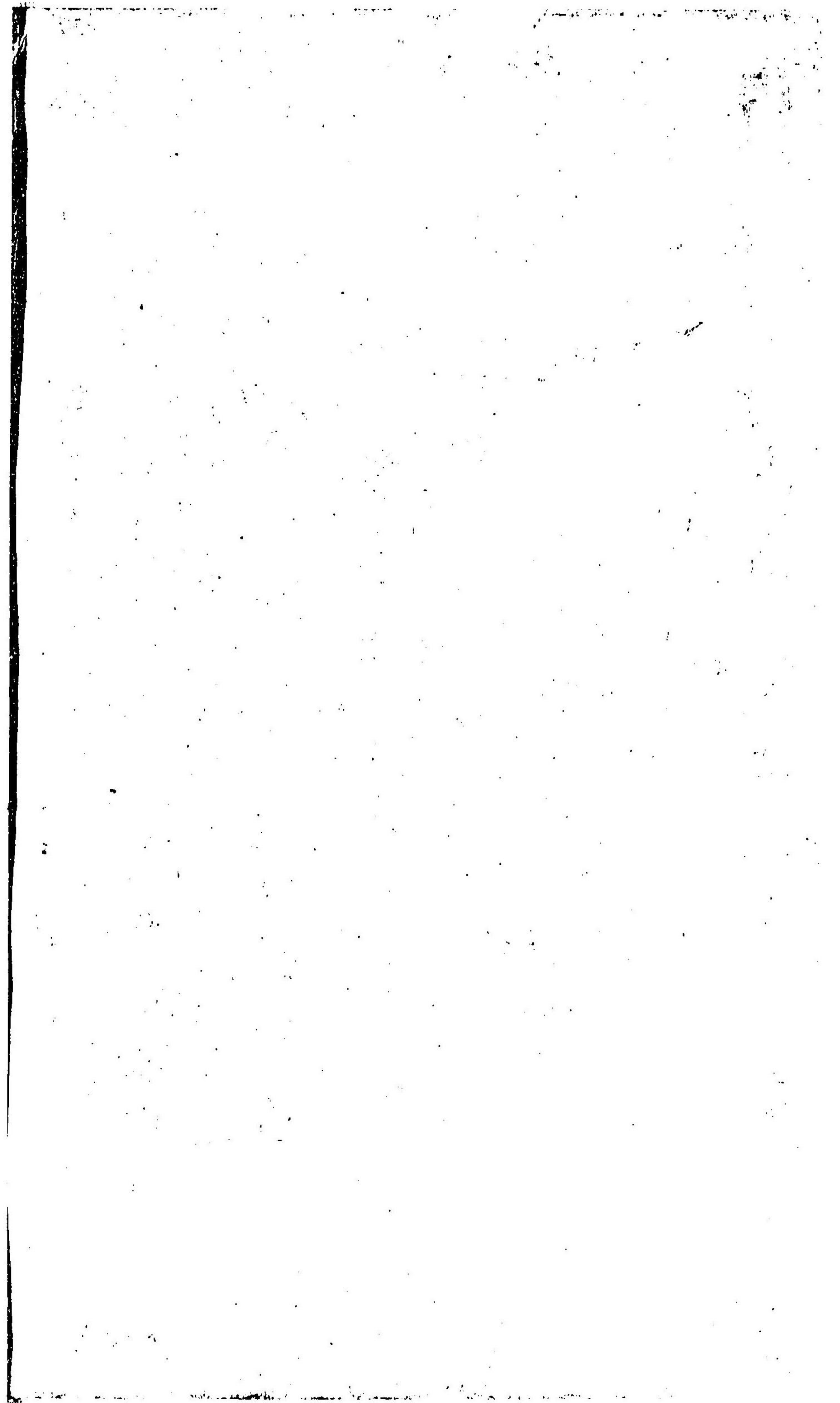
同

和解者

同

出版人

發兌元



山
東
通
志